



「ケータイ世代」への 宣教と牧会

しんこと に こ ひつじ
新琴似小羊教会

小 岩 裕 一

生活に不可欠なケータイ

「ケータイ」は、通話だけの「携帯電話」ではなく、メール、カメラ、動画、音楽、テレビ、ゲームなどの高度な情報端末です。今は「お財布」にまでなるようです。朝起きて先ず「メル友」を確認。夜はケータイからの音楽を聞きながら眠りにつきます。生活のあらゆる場面で待ち受け画面を見ている姿は見慣れた光景です。防犯のために子ども向け、高齢者向けケータイもあります。子どもたちでさえ、「ケータイがなければ生きていけない！」と言います。

ケータイの危うさ

「ウツソーツ」「マジ」「カワイイ」と連発する今の子どもたちは、「ケータイ世代」です。単語だけの会話もケータイの影響でしょうか？親や教師が知らないうちに、「いじめ」「非行」が「メル友」を通じて広がります。全世界で飛び交う八割は迷惑・不健全メールと言われています。犯罪につながる「出会い系サイト」も簡単に検索できます。小さな液晶画面を見続ける不健康や電磁波の影響も心配です。

ケータイで世界中の情報とつながっていますが、逆に人間関係を狭くさせ、対人関係の苦手な子どもたちをつくっているのではないかとの指摘もあります。ケータイを持たない少数派の子は仲間に入れない面もあるようです。ちなみに我が家は少数派ですが大丈夫です。持っている子どももメールが入らない淋しさを感じて、安易にアドレスを交換し、嫌なメールで傷つい

てしまった例もあります。

『ケータイを持ったサルー「人間らしさの崩壊」』（正高信男 中公新書 二〇〇三年）では、豊かな人間性を失わせてしまっている面を指摘しています。一読に値します。「ケータイのマネーやしつけ」は誰が教えているのでしょうか。

「ケータイ世代」と教会学校

教会学校では、密接に、人格的にお互いが触れ合うことができます。安心して信頼できる人の交わりが教会学校にあります。人の言うことに耳を傾け、自分の考えや気持ちを素直に言える分級の交わりを大切にしたいものです。

ケータイは便利ですが、支配されて「偶像」（神様以上）になってしまわないか心配です。ケータイを横に置いて、神様からの言葉に耳を傾けることを小さい時から経験することが大切です。特に「ケータイ世代」の子どもたちにとって、神の前に静まること、魂を養い強くします。

ケータイを積極的に活用することもできます。教師が「メル友」となり、子どもたちの信仰生活を助けたり、また祈り合うこともできます。デポジションのテキストを発信することもできます。実行している教会もあるようです。

ケータイの費用を節約して、伝道や信仰良書購入に用いることも幸いなことです。

次の教会を担うのは「ケータイ世代」の子どもたちです。彼らへの宣教と牧会のために、何ができるでしょうか。福音は変わりませんが、祈りと知恵が必要です。

牧羊者

目次

巻頭言 1

教師養成講座
新約聖書丸ごと早わかり 3

信仰生活 〓1月教案〓 9

教会生活 〓2月教案〓 21

教会の完成 〓3月教案〓 33

牧羊ひろば（香登教会） 45

おわりに 46

教師養成講座

新約聖書丸ごと早わかり(3)

工藤 弘雄

ヘブル人への手紙を理解する

1 執筆者、執筆の時と事情

65年から69年頃。執筆者は不明。ヘブル人、すなわちユダヤ人のクリスチャンに宛てて信仰が逆戻り（バックスライド）しないように励まし、信仰にとどまらせることを目的に書かれました。

2 ヘブル書の特徴

①ヘブル書の中心は、天上におけるイエス・キリスト。第5の福音書とも言われています。

②ユダヤ教に比べようもないキリスト教の「はるかにすぐれた」卓越性（はるかに優れていること、優位性（優れた立場））が示されています。

③大祭司のキリストのみ姿は、現在のキリストのみ姿。

④贖罪の効力が明確に語られています。

⑤旧約聖書における信仰の勇者の列伝も圧巻。

⑥特徴的な言葉。「永遠」、「完全」、「一度」、「血」、「…なしに」、「さらに良い」、「私たちは…を持っている。それゆえ…しようではないか」、「座し」、「天」などです。

⑦いくつかの警告の言葉も特徴です。

3 ヘブル書のメッセージ

神の子キリストの卓越、優位性

①預言者よりもはるかに優れるお方。

②天使よりもはるかに優れるお方。

③モーセよりもはるかに優れるお方。

④ヨシヤよりもはるかに優れるお方。

⑤アロンよりもはるかに優れるお方。

⑥旧約契約にはるかに優る新契約の仲保者。

⑦古い幕屋、神殿にはるかに優る新しい幕屋。

⑧古い犠牲にはるかに優る唯一、完全、永遠の犠牲。

⑨神の子キリストの三大顕現。過去、罪を取り除くために現れ（9・26）、現在、御父の右に現れ（9・24）、将来、栄光の中に現れる。（9・28）。

⑩信仰の勇者に励まされ、信仰の創造者、完成者であられるイエスを仰ぎつつ走ろう。

4 梗概

教理的部分 1・1～10・18

①キリストの人格の卓越性（1・1～4・16）

②キリストの祭司職の卓越性（4・14～7・28）

③キリストの贖罪の卓越性（8・1～10・18）

実行的部分（10・19～13・25）

①大いなる救いによる生涯（10・19～39）

②信仰による歩み（11・11～12・29）

③愛と善行の勧め（13・1～19）

④終りのあいさつと祝福（13・20～25）

公同書簡とは

ヤコブ、ペテロ第一、第二、ヨハネ第一、第二、第三の、そしてユダの手紙は、公同書簡と呼ばれています。それは、これらの手紙が、特定の教会や、一地区の諸教会にあてた手紙ではなく、もっとと広い範囲の教会への手紙だからです。

ヤコブの手紙を理解する

1 執筆者、執筆の時と事情

本書の執筆者は、「主の兄弟ヤコブ」。エルサレム教会の重要な指導者。かなり早い時期にエルサレムから国外に散っていたユダヤ人クリスチャンにあてて書かれました。試練にあつてはいる者を励まし、信仰があれば行いがなくてもよいという者を戒め、この世の欲望に引きずられる者たちに厳しい警告を与えるのが目的です。

2 この手紙の特色

①すべての手紙の中でも最も实际的です。

②象徴的比喻で満ちています。文体も劇的です。

③ヤコブの手紙とパウロの手紙は対立するように見えますが、実は一つです。ヤコブも行為を強調しましたが、生きた信仰には必ず忍耐や神への服従が伴うことを強調したのです。

3 ヤコブ書のメッセージ

①試練をも歓喜とせよ。信仰＋試練＝信仰×験し＝信仰ーかす＝忍耐（小島伊助師）。

②内在の我欲からきよめられるように。

③み言葉は生きて働く完全な自由の律法。

④栄光の主が見えてれば、人を分け隔てできない。

⑤悪魔さえも唯一の神の存在を信じる。しかし、神への愛、神に対する服従はない。真の信仰は行いを生み出す。神の友アブラハムを見よ。

⑥舌を制する人こそ完全な人。

⑦聖き人とは上よりの知恵に満ちた人。

⑧世と悪魔と肉は悪の三位一体。知れ、神はねたむほどに私たちを愛される。

⑨神に従え。神に近づけ。主の前にへりくだれ。

⑩全ての行動が神のみこころの中にあるように。
⑪ヨブの忍耐を学べ。ヨブは主の結末を見ていた。
⑫現在の教会の姿(5章13節以下)

教会の中にいる人々(a)苦しむ者(b)喜ぶ者(c)病める者(d)正しい者(e)迷う人(f)罪に陥る者(g)引き戻す者

教会にあるもの(a)祈り(b)讃美(c)癒し(d)罪の赦し
(e)愛の交わり(f)祈りの答え(g)救霊
祈りのすばらしさ(a)自分のための祈り(b)とりなしの祈り(c)信仰の祈り(d)協力の祈り(e)義しい人の祈り(f)切なる祈り(g)さらなる祈り

4 梗概

あいさつ(1・1)

信仰と試練(1・2～1・18)

信仰とみ言葉(1・19～1・27)

信仰と兄弟愛(2・1～2・13)

信仰と行い(2・14～2・26)

信仰と舌の制御(3・1～3・12)

信仰と真の知恵(3・13～3・18)

神中心の信仰生活(4・1～4・15)

①愛される神(5) ②与えられる神(6) ③近づかれる神(8、10) ④さばかれる神(12) ⑤すべて

治められる神(15)

富んでいる人への警戒(5・1～6)

忍耐と慰め(5・7～12)

祈りについての教え(5・13～18)

迷い出た者を連れ戻せ(5・19、20)

ペテロの第一の手紙を理解する

1 この手紙を書いたペテロ

福音書におけるペテロと使徒行伝や手紙に見ら

れるペテロには大きな相違があります。ペンテコステ以後、聖霊に満たされた彼は、忍耐強く、愛に満ち、勇気ある神の人に変えられています。

2 執筆の時代と場所

この手紙は皇帝ネロの迫害が激しさを増した63年頃、「バビロン」(5・13)で書かれ、同労者のシルワノに委託しました。

3 執筆の事情

本書簡は「離散し寄留している人たち」(1・1)異邦人社会の中に「散らされた旅人」である信者に宛て書かれました。今、聖霊は世にあつて試みられ、戦っている全信者に語りかけています。

4 この手紙の特色

①苦難の中にあるクリスチャンを励ます手紙。

②クリスト者の苦難と栄光!「苦難」は14回、「喜び」・「栄光」は26回も強調。

③7つの尊いこと。尊い試練(1・7)、尊い血(1・19)、尊い生ける石(2・4、6)尊いクリスト(2・7)、尊い霊(3・4)、尊い信仰(Ⅱペテロ1・1)、尊い約束(後書1・4)

④ヨハネが「愛の使徒」、パウロが「信仰の使徒」であれば、ペテロこそ「希望の使徒」でした。

5 梗概

あいさつ(1・1、2)

救いの恵み(1・3～12)

神に対してもつべきクリスト者の態度(1・13～2・10)

この世におけるクリスト者(2・1～3・12)

苦難と戦うクリスト者(3・13～4・19)

教会に対する勧め(5・1～11)

終りのあいさつ(5・12～14)

ペテロの第二の手紙を理解する

1 執筆の時と事情

ペテロの殉教より少し前の66年頃。ローマの大震災もあり、皇帝ネロの迫害も厳しさを増している頃、ローマで書かれたと思われます。当時、偽教師による異端があらわれ、不道徳をもって教会内をかき乱そうとしていました。これに対して信者に警告し、その徳を高めるために書かれました。

2 この手紙の特色

①第一書は慰めの手紙、第二書は警告の手紙。

②外部からの激しい迫害の中での励まし、教会の内部にある危険に関して警告。

③内側からの危険に対して勝利の秘訣は、「恵みと知識」によって強くなること。小島伊助師は第一

書講解に「聖選の宿人」、本書講解に「主を知る知識に進め」とタイトルをつけています。主の恵みに徹し、ますます主との交わりが深められるとき、異端やあざけりに勝利できます。偽ものに勝つ秘訣は、本物をとことん知ることです。

3 梗概

あいさつ(1・1)

主を知る知識とクリスト者の成長(1・2～1・21)

私たちの広大な貯蔵(1・2～4)

私たちの実質的な進歩(1・5～11)

私たちの不動の確信(1・12～21)

主を知る知識とクリスト者の危険(2・1～2・22)

偽教師・その教え(1・1～3)

偽教師・その滅亡(2・4～8)

偽教師・その行い(2・9～22)

主を知る知識とクリスト者の希望(3・1～3・18)

再臨の真理あざけられる(3・1〜4)
再臨の真理確証される(3・5〜10)
再臨の真理適用される(3・11〜18)

ヨハネの第一の手紙を理解する

1 執筆の時代と場所、その事情

ヨハネは本書簡を、紀元90年頃、エペソで書いたと思われます。新約聖書の聖文書では最後期のものの一つで、福音書よりも後に、黙示録よりも前に書かれたと思われます。

本書簡は多分、エペソを中心に黙示録のように小アジアの諸教会にあてて書かれたと推測されます。当時、小アジアの諸教会には異端の教えが入って来る危険がありました。彼らはイエスがキリストであることを否定し、また、イエスが神の子であることを認めようとしませんでした。さらに、彼らは、キリストが肉体をとってこの世に來たことを否定しました。聖書は、キリストは全く神であられ、全く人であられたと記します。全き神が、罪をほかにして私たちと全く同じ人間になられました。この手紙の冒頭では、キリストは五感で認識できるお方として、この地上に來られたことを記しています。正しい福音の教理は正しい生活に導き、誤った異端的教えは誤った生活に導きます。彼らは道徳的にも誤った生活をしていました。この異端に警戒するようにこの手紙は書かれました。

2 この手紙の特色

ヨハネの福音書の執筆の大きな目的は、「イエスは神の子キリストであると信じるため」(ヨハネ20:31)でした。

この手紙は「神の子の御名を信じる者」が「永遠のいのちを持つていることを、悟らせるため」(5:13)に書かれました。ですから、福音書の鍵の言葉は「信じる」こと、書簡のそれは「知る」ことになります。キリストを信じ、人格的に知る。そこに成長があります。「知る」は本書簡30回以上も用いられています(たとえば2:3、5、29、3:14、16、19、24、4:13、16、5:15、18、20)。

この手紙の最大の特色は、「愛の書簡」。福音書は信仰、黙示録は希望、本書は愛に關しての手紙です。老使徒ヨハネは厳しい言葉をもって異端を攻撃すると共に、懇切に愛を説いています。

小島伊助先生は、本書に三つのLがあると仰いました。Light(光)とLife(命)とLove(愛)です。ジョン・ウエスレーはこの手紙を愛読し、「キリスト者の完全」とは「愛における完全」であり、キリスト者の聖化とは「罪を排除する愛」(Love Excluding Sin)と言いました。

3 ヨハネ第一の手紙のメッセージ

神との歩みにおける7つのステップ(階段)

第1ステップ・光の中を歩む(1・7)。

第2ステップ・罪を認め、告白し、御子の血にきよめられる(1・7〜9)。

第3ステップ・神のみこころに従う(2・4)。

第4ステップ・キリストに倣う(2・6)。

第5ステップ・他人を愛する(2・9〜3・16)。

第6ステップ・世を退ける(2・16)。

第7ステップ・罪に勝ち、義を行う(3・1〜10)。

4 梗概

序言(1・1〜4)

神との交わり(1・5〜2・2)

神を知る生活(2・3〜29)
神の子供としての生活(3・1〜4・21)
信仰による勝利(5・1〜21)

ヨハネの第二の手紙を理解する

1 執筆の時代と場所

年代、場所については第1の手紙と同じと言えるでしょう。

2 あて先

聖書中、女性にあてた唯一の手紙。「長老のわたしから、真実に愛している選ばれた婦人とその子たちへ」。(1) 教会はギリシャ語で女性名詞、キリストの花嫁にたとえられているので、「婦人」は教会をさしていると解釈する人もいます。

3 梗概

あいさつ(1〜3)

互いに愛し合うこと(4〜6)

反キリスト者を警戒すること(7〜11)

終わりのあいさつ(12、13)

4 ヨハネの第二の手紙のメッセージ

「真理」という言葉がわずか13節中5回も見だされます。ヨハネが語っている真理は、上からの真理、キリスト・イエスにある真理。単に真理を賞賛するだけでなく、真理によつて歩む。そうすれば、互いに愛し合うことができます。真理の中を歩む愛の生活がこの手紙のメッセージです。

ヨハネの第三の手紙を理解する

1 執筆時代と場所

年代、場所については第1の手紙と同じと言えるでしょう。

2 執筆事情

ガイオの所属していた教会にデオテレペスという人物がおり、使徒たちをのしり、服従せず、勝手に振舞っていました。(9、10)ヨハネは、ガイオがデオテレペスに従わないように注意し、旅先にある巡回伝道者の世話をすることを奨励するために、この手紙を書き、たぶんデメテリオによって、ガイオに届けられたと思われます。

3 あて先

執筆事情で見たように、「ガイオ」(1)という人物にあてて書かれています。ガイオという名前は、当時かなり一般的な名前であったように思われます。(使19・29、ロマ16・23、1コリ1・14)。おそらく、エペソ周辺の長老か教会員であったのでしょう。彼は旅先にある巡回伝道者をもてなし、ヨハネから称賛されています(5)。巡回伝道者についての言及は、1世紀末の教会事情を知る上で興味深いものがあります。

4 ヨハネの第3の手紙のメッセージ

教会の中でガイオとデオテレペスとデメテリオ。ガイオは真理の中を歩み、巡回伝道者をもてなす。デオテレペスは野望と自己中心で使徒たちをのしる。デメテリオは証明済みのクリスチャン。私たちはガイオとデメテリオにならないでしょう。真理の中を歩んでいる者を「見る」から、「聞く」。小島先生は、失明後、この老ヨハネの記述に共鳴されていたことを思い出します。

5 梗概

あいさつと祈り(1〜2)

ガイオに対する称賛(3〜8)

デオテレペスに対する非難(9〜11)

デメテリオの紹介(12)

終わりのあいさつと祝福(13〜15)

ユダの手紙を理解する

1 この手紙を書いたユダ

「ヤコブの兄弟であるユダ」。ヤコブはヤコブの手紙を書いた主の兄弟ヤコブ。したがって、ユダも主イエスと兄弟。マタイ13章55節に「この人は大工の子ではないか。母はマリヤといい、兄弟たちは、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか」とあり、ユダの名前が記されています。

2 執筆の時と場所

この手紙はペテロの第二の手紙よりも後に書かれたと思われます。時期は70年から80年の間。執筆場所については不明です。

3 執筆事情

ヤコブ書と同様に、各所に散在していたユダヤ人信者にあてて書かれたと思われます。最初は「共にあずかっている救いについて書くこと」(3)準備していましたが、異端の教えが入ってきたのでこの手紙を書く必要を感じたのです。この異端はペテロの第二の手紙に見られるものとよく似ています。異端者たちは道徳的に放縱な生活をしていました。

4 この手紙の特色

旧約偽典の『モーセの昇天』からの引用(9)、『第1エノク書』からの引用(14、15)があります。ユダはこれらの偽典を正典として受けとめていたのではなく、当時読者によく知られていたから引用したのです。3節の「聖徒たちによって、ひとたび伝えられた信仰」は1世紀後半に、すでにキリス

ト信仰の体系が確立していたことを示しています。

5 ユダの手紙のメッセージ

キリスト信仰を妨害する者と、キリスト信仰者の対照がはっきりしています。
妨害する者

不敬虔で世的な者・神の恵みを放縱に変える肉
的な者・唯一の主なる神を否定する者・権威ある
者たちを軽んじ、榮えある者たちをそしめる者・ぶ
つぶつ不満を鳴らす者・へつらつて人をほめる者・
御霊を持たず、生まれつきのままの者。
信仰者

最も神聖な信仰の上に自らを築き上げる・聖霊に
よって祈る・神の愛の中に自分を保つ・神のあわれ
みを待ち望む・神のために魂を導く・神の守ってく
ださる力にゆだねる者。最後の祝福は圧巻です！

6 梗概

あいさつ(1、2)

信仰の危機の到来(3、4)

さばきの先例(5〜7)

異端者たちに対する非難(8〜16)

信仰者たちへの励まし(17〜23)

祝福(24、25)

ヨハネの黙示録を理解する

1 黙示録を書いた人

ヨハネ福音書、ヨハネの手紙の記者である使徒
ヨハネが本書の記者です。

2 黙示録の書かれた時と場所

ローマ皇帝ドミティアヌスの迫害の時代。紀元
96年、ドミティアヌス死去の頃と推定。執筆場所
はパトモス島。エペソから南西90キロのエーゲ海

上の島。南北16キロ、東西9キロの三日月形をした小さな島。迫害でこの島に流されていたヨハネが、幻を示されてこの書を書きました。

3 この書の執筆の事情

1章10、11節にあるように、主イエスご自身が直接、ヨハネに書き送るように命令をされました。ですから「ヨハネの黙示録」は厳密には「イエス・キリストの黙示録」。主イエスが当時迫害の中にある小アジアの諸教会の信徒を励まし、キリストとその王国が最後に勝利を得ることを示されました。その勝利は、主の再臨によってもたらされるものです。

4 この書のあて先

直接的にはアジアにある七つの教会(1・4、11)。しかし、必ずしもこれらの教会に限定する必要はありません。これらの教会に代表される全ての教会にあてて書かれたと考えられます。

5 この書の特徴

この書は新約聖書における唯一の預言の書です。「黙示」(1・1)とされているように、普通の書とは異なり、象徴的表現が多く用いられています。また、数字の「七」がしばしば出てきます。「七つの教会」、「七つの封印」、「七つのしるし」、「七つの災害」、「七つのラッパ」、「七つの鉢」、「七つの新しいこと」などです。

6 この書の解釈

この書は難解の書とされ、解釈も種々あります。この書の解釈を大別すると四つです。

(1)過去派 本書の記事は過去の歴史においてすでに終わった事実の記録と見る説。

(2)歴史派 使徒時代から歴史の終末まで世と教会との闘争の歴史を描いたとの説。

(3)理想派、精神主義 実際の出来事についてはなく、キリスト者は悪の勢力と戦うとの説。

(4)未来派 1章19節に立つ説です。「そこで、あなたの見たこと、現在のこと、今後起ろうとすることを、書きとめなさい」。今後起ろうとする世の終末の出来事は4章以下に記述。この解釈が最も一般的で、また本書を理解する上で最も適切であると考えられます。

7 ヨハネ黙示録のメッセージ

(1)栄光の主の顕現に触れた者(1章)
七つの金の燭台(教会)の間に立たれるお方。この主を拝し、ヨハネは倒れます。栄光の主を拝し、触れ、み声を聞く。それが迫害の中の勝利の秘訣です。

(2)七つの教会へのメッセージ(2、3章)

七つの教会のそれぞれの書簡に、宛先、主の姿、主が知られる美点、責むべき点、警告、約束などがあります。御霊のみ声を心にとめましょう。

①エペソ教会「初めの愛に帰れ」

②スミルナ教会「死に至るまで忠実であれ」

③ペルガモ教会「悔い改めよ。そうしないと…彼らと戦おう」

④テアテラ教会「持っているものを堅く保て」

⑤サルデス教会「白い衣を着せられる」

⑥ヒラデルヒヤ教会「冠をだれにも奪われるな」

⑦ラオデキヤ教会は現代の教会とも言われます。なまぬるく、自分のみじめ、貧困、盲目を知らないので。譴責(けんせき)のない教会はスミルナ教会とヒラデルヒヤ教会のみでした。

(3)天上の礼拝のメッセージ(4章)

ヨハネは御霊に感じ、目は開かれ、霊界を見ま

す。教会が下界の苦難と試練と闘争の中から測り知れない栄光の輝きの中に携挙(ききよ)されます。24人の長老は贖(あがな)われた聖徒の代表です。冠を投げ出し、み前にひれ伏し、礼拝する姿こそ真の礼拝者の姿です。

(4)巻物の封印を開くお方(5章)

悪魔により失われた地を贖うお方はユダ族のし、ダビデの若枝、ほふられた小羊なる主イエスのみです。(5・7)。「ほふられた小羊こそは…ふさわしい！」天上の大賛美、大礼拝です。

(5)封印の開封(6、7章)

いよいよ、教会が天に携え上げられたのち、地上に起こる患難時代の出来事です。第一の開封は「勝利の白馬」 第2は「戦争の赤馬」 第3は「飢饉の黒馬」 第4は「死の青白馬」 第5は「殉教した人々の靈魂の叫び！」 第6は「天変地異と小羊の怒り」。

第6と第7の開封との間に一つの挿話。「印をおされた者は十四万四千人」(7・4)は選民の救い、後半あらゆる国民、つまり異邦人の救い。そして、全天をあげての賛美と礼拝です。小羊の血こそ天国への門鑑です。(7・14)

(6)七つのラッパ(8・3、11・19)

七つの封印の開封から、七つのラッパの審判と七つの鉢の審判とが続きます。今や8章からは第七の封印が解かれ、新段階に入ります。

まず、第七の封印の開封です。聖徒の祈りとその答えの天の挿話が入ります。そして、いよいよ、ラッパが順番に吹かれます。第1のラッパは「ひょうと火が降る地の災」。第2のラッパは「火の燃える山のための海の災」。第3のラッパは「星が落

ちた川の災」。第4のラツパは「日、月、星の暗黒」。そして、残る三つの災の予告が入ります。

9章に入ると、第5のラツパは「底知れぬ所の穴から上つて来るいなごの災」。第6のラツパは「不思議な騎兵隊の災」。

第6と第7のラツパの前に、10章の霊界の除幕、主イエスのご顕現。(10・1～3) ヨハネはこの栄光の主から巻物を受けて食べます。11章に入ると二人の証人の殉教と復活、昇天です。

(7) 天上の戦いと地上の迫害 (12章)

第7のラツパで奥義は完成し、この世の国はキリストの国となりました。ですから、第7のラツパで、歴史は栄光の終結となりました。12章からは別の幻で、別の方面から終末の預言がなされます。それは「大いなるしるしが天に現れた」(12・1) という天の栄光から始まり、サタンに従った国民のさばきで終わっています。

15章から19章では、ここでも「またわたしは、天に大いなる驚くべきほかのしるしを見た」(15・1) という天の栄光から始まり、世のさばきをもつて終わっています。

(8) 悪魔の三位一体 (13章)

13章では、神を汚す名の獣が出現。「龍」(2) は父なる神に対する悪魔(12・9)、「獣」(1) はキリストに対する反キリスト、「ほかの獣」(11) とは聖霊に対する悪霊とも云えるでしょう。しかし、このサタンも再臨の主が地上に降臨して世をさばかれる時に裁かれます。このことがぶどうの収穫に例えて記されています。

(9) 七つの鉢のさばき (16章)

16章には「七つの鉢のさばき」を見ます。第1

の鉢は「でき物」。第2は「海の生き物の死」。第3は「水が血に変化」。第4は「太陽の炎熱」。第5は「暗黒と苦痛」。第6は「3つの汚れた霊」。そして、第7の鉢は「いなすま、もろもろの雷鳴、地震、霊によるさばき」です。ハルマゲドン(メギド・殺害の山)(16・16) に集つての戦いです。そして悪魔に支配されたこの世は審判を受け、悪魔帝国「バビロン」は滅亡し天上で大賛美がわき上がります。

(10) 小羊の祝宴、千年王国 (19章)

悪魔の帝国「バビロン」が滅ぼされるとき、天に「ハレルヤ・コーラス」がわき上がります。そして、小羊の婚姻の時が来ます。(19・6、7)。小羊なるキリストとその花嫁である教会は完全に一つとされます。そして、20・2にあるようにサタンは束縛され、千年の間、地上にキリストの王国が建設されます。イザヤをはじめ、旧約時代の多くの預言者がそのことを預言しました。地に戦争がなくなり、動物の間にも平和があります。「御国をきたらせたまえ」との祈りはこの時に完全に成就するのです。

(11) 新天新地 (20～22章)

千年王国の終わりに、サタンの解放があり、最後の大審判が行われます。死んでいた大いなる者も小さい者も共に、神の前に立つのです。そして、死人はその仕業に応じ裁かれます。いのちの書に名の記されていない者は、みな火の池に投げ込まれます。(20・14)。勝利を得た者と裁かれ捨てられる者とは明確に二分されます。そして、聖なる新しいエルサレムは天から下つて来ます。神は共に在す。涙も、死も、悲しみも、叫びも、痛

みもない新天新地の世界が開かれました。

もう聖所はありません。都全体が聖所です。日や月の光は必要がありません。神の栄光の輝きが都のすみずみに照り輝いています。神と小羊のみ座からいのちの川は流れ、すべてのものを生かすのです。呪われるべきものは何一つありません。

6 本書の梗概

緒言 1・1～3

七教会への書簡 1・4～3・22

天上の礼拝 4・1～5・14

封印の開封 6・1～8・2

七つのラツパ 8・3～11・19

天上の戦いと地上の迫害 12・1～18

海からの獣と地からの獣 13・1～18

天における賛美と審判の告知 14・1～20

七つの鉢のさばきの準備 15・1～8

七つの鉢のさばき 16・1～21

バビロンの審判 17・1～19・3

小羊の婚宴 19・4～10

地上再臨の主 19・11～16

反キリストと従者たちの審判 19・17～21

千年王国 20・1～15

新天新地 21・1～22・5

結びのことは 22・6～21

警告と励まし

これらの預言は信ずべきです。深く深く心にとめるべきです。「御霊も花嫁も共に言った、『きたりませ』。私たちのうちに聖霊がお住みであれば当然、主イエスの来臨を切に待ち望むのです。『しかり、わたしはすぐに来る。アアメン、主イエスよ、きたりませ！』」。

聖書 イザヤ43・14～21 テーマ 新しいみわざ

序論

(鎌野)

新年の最初の主日、イザヤ書から、神のなさる新しいみわざについて学びたい。今日の中心聖句は年頭によく引用される有名な言葉だが、その背景を知ることによって、より深い意味が分かるだろう。イザヤ書は、40章からその内容が大きく変化する。前半にはさばきが強調されているのと対照的に、後半では神の民イスラエルの将来についての希望に満ちた預言が展開されるのだ（後半は、イザヤの晩年、紀元前700年以降に書かれたものと推測されている）。この43章では、主は力強く、神の民に敵する者たちの滅びと、神の民の救いを宣言なさっていることに注目しよう。

一、神の宣言

14節と15節には、主なる神がどういってお方かが、幾つかの言葉で示されている。「あなたがたをあなたがたの者」、(イスラエルの聖者)、(イスラエルの創造者)、(あなたがたの王) などである。これは、直前の10～13節からも分かるように、主のみがイスラエルの民を救い出す、唯一の神であることを示すためにほかならない。

新年には、心機一転、新しいことをやろうと決心することが多い。だが自分の力でやろうとしてもなかなかできないのが現実だろう。大切なのは、主がなしてくださるとの信仰である。主が信じる者の内に働いて、新しいことをしてくださるのだ。

二、敵の滅び

本日の個所で、「主はこう言われる」と、二度記されていることに注意したい(14、17節)。第一の主の言葉は、バビロニア帝国の滅びについての預言である。イザヤの晩年はアッシリヤ帝国の全盛期であり、バビロニアはまだ小国だった。当時の南王国の王ヒゼキヤは、この国と反アッシリヤ同盟を結ぶが、これを知ったイザヤは、将来、強大になったバビロニア帝国によって南王国が滅ぼされ、多くの人々が捕囚となることを預言したので(39章参照)。そしてこれは、それから約100年後に文字どおり成就する(紀元前586年)。

しかしこの章で主は、「わたしは人をバビロンにつかわし、すべての貴い木をこわし、カルデヤびと(バビロニア人のこと)の喜びの声を嘆きに変え、多くの人々が捕囚となることを預言したので(39章参照)。そしてこれは、それから約100年後に文字どおり成就する(紀元前586年)。」

しかしこの章で主は、「わたしは人をバビロンにつかわし、すべての貴い木をこわし、カルデヤびと(バビロニア人のこと)の喜びの声を嘆きに変え、多くの人々が捕囚となることを預言したので(39章参照)。そしてこれは、それから約100年後に文字どおり成就する(紀元前586年)。」

「主は、約150年後に起こることを、イザヤに示された。当時の多くの人々はこの預言をまともに信じなかったであろう。しかし、事実、それは起こったのである。」

三、民の救い

第二の主の言葉は、神に選ばれた民の救いについて預言する。「あなたがたは、さきの事を思い出してはならない、またいにしえのことを考えては

ならない」と主が言われたのは、出エジプトの出来事だけで主の働きは終わったのではないことを知らせるためだった。主がなされるのは、それとは違った「新しい事」である。それは「荒野に道を設け、さばくに川を流れさせる」、ことだと主は言われる。

確かに主は、異邦人の王クロスの心を感動させたので、王は即位後すぐ、イスラエルの捕囚民が故国に帰り、主の宮を復興しよう命令した。しかも周囲の人々から金銀財宝を与えられ、堂々と帰国できるようにしたので(エズラ1章参照)。バビロンからエルサレムまでは直線距離でも約1千km、その間には広大な荒野とさばくが存在する。しかし王は、そこに大路を作るように命じたのである(小林和夫『イザヤ書講解説教下』89頁)。これは第二の出エジプトと言えるだろう。

しかし第一と第二の出エジプトはひな型ではない。もっとすばらしいのは、主イエスのなされた十字架による贖いである。これによって、エジプトやバビロンからの救いよりはるかに優れた、罪からの救いが実現した。これこそ、主がなされた「新しい事」にほかならない。律法による救いという古い契約ではなく、ただ信仰によって救われるという新しい契約がここに成立したのだ。

結論

新しい年、新しい事を主に期待しようではないか。自分に、あるいは、まだ救われていない友人に、主は新しいみわざをなしてくださると信じよう。そのため、私たちにできることは何だろうか。

研究資料

(石田)

本章には、神がイスラエルの民を創造し、贖い（買戻し）、所有し、ご自身の栄光のために仕立て上げるといふ約束が繰り返し、印象深く記されている。一度契約を結んだ民とは、どんなに背信が繰り返されたとしても、愛と懲らしめをもって引き戻し、ご自身に似た者へと引き上げようとする神の真実が貫かれていた。これはキリスト者が、神との関係においてそのまま自分に当てはめられることである。

テキスト

14 あなたがたをあがなう者、イスラエルの聖者、主 神は信仰者との関係を明らかにし、ご自分への信頼を呼び覚まそうとしておられる。「あがなう」には、奴隷に売られた身内を身代金で買い戻すという意味がある。1、3節では、出エジプトの際、神がイスラエルの民をエジプトの初子によって贖った事実が強調されている。14節ではバビロン滅亡によってイスラエルを贖うといわれている。**わたしは人をバビロンにつかし、すべての貴の木をこわし：**ここにイスラエルの民を捕囚にしていたバビロンの滅亡が預言されている。これはバビロン滅亡に関する最初の宣言である。バビロンに遣わされる人とは、ベルシャ王クロスのこと。**カルデヤびとの喜びの声を嘆きに変らせる**カルデヤ人はバビロンに隷属する諸民族に対して支配階級であった。カルデヤ人に代表されるバビロンは、長く近隣諸国を服属させてきた高慢が打ち碎かれることになる。

15 イスラエルの創造者 神は民を造った以上、最後まで責任をもって導こうとしておられる。**あなたがたの王である** 王は民の父、また牧者として慈愛深く、時に厳しく治めるべきものであった。これは、神がそのようにイスラエルと血の通った関係を持とうとしていることを表している。

16 海のなかに大路を設け、大いなる水の中に道をつくり：モーセが分けた紅海の水を元に戻した時、後を追ってきたエジプトの兵馬は海に吞まれてしまった。この大勝利は、イスラエル民族にとつて子々孫々に語り継ぐべきことである。それは彼らの力の勝利ではなく、全く神の奇跡による勝利であった。ここで神はそのことを思い起こさせようとしている。

18 あなたがたは、さきのことを思い出してはならない：この記念すべき大勝利を、今度は思い出してはならない、忘れるようにと神は言われる。その理由は、神が民に対してそれよりもっと大いなる事をしようとしているからである。これは私たちが、過去の祝福体験を感謝しつつも、それにしがみついてはならず、これからの神のみわざを大いに期待せよということであろう。

19 見よ、わたしは新しい事をなす ここにはイスラエルの将来に対する神の計画が宣言されている。これは神の主権に基づくことで、イスラエルの願望を超越している。同じく神の主権は13節にも明らかである。新しい事とは、バビロン捕囚からの解放とエルサレム帰還のことである。出エジプトにまさる民族の歴史であり、新しい出エジプトである。しかしイザヤが予見していた、さらな

る新しい事とは、メシアが来て、人類を罪と滅びから解放し、真の救いをもたらすことであった。出バビロンもその予表である。**やがてそれは起る**紀元前538年、イザヤの預言から約200年後に起きる出来事である。預言どおり、ペルシャのクロス王がバビロンを滅ぼし、イスラエルの民を帰国させることになる。バビロンはイスラエルのための贖いとなつて滅びる（4）。イザヤはペルシャの国もまだ興っていない段階で、クロス王の名前まで挙げている（44・28）。**荒野に道を設け、さばくに川を流れさせる** 起こり得ないことを起こそうという神の宣言。ペルシャ王クロスは、諸国に命じてバビロンからエルサレムまでの荒野に石畳の道を設けさせたとも言われている。神が異邦人をさえ、自由にお用いになるよい例である。

20 わたしが荒野に水をいだし、さばくに川を流れて、わたしの選んだ民に飲ませるからだ 神はご自分の民のためなら、自然を超越して、不可能を可能にしてくださる。それを見た諸国民は、ただ主の名を恐れ、あがめる。

21 この民は、わが誓を述べさせるためにわたし **が自分のために造ったものである** イスラエルはかたくなな背信の罪のために捕囚という辱めを受けたが、神の全くの恵みによって解放されることになった。彼らの功績ではない。ただ救いを祈り続けただけである。それでも神はイスラエルをご自身の栄光を現す民だと言われる。

参考図書 『キリスト者学生会聖書注解』、『実用聖書注解』、『新聖書注解』、『ティンブル聖書注解』など。

7日 礼拝メッセージ例

聖書	イザヤ43・14～21
タイトル	新しいみわざ
暗唱聖句	見よ、わたしは新しい事をなす。 やがてそれは起る。
目 標	新しい年、神の新しいみわざを 期待しよう。
	イザヤ43・19

導入

(松浦み)

新しい年を迎え、楽しい冬休みも終り、3学期が始まりますね。受験生には追い込みの緊張した日々、主の助けを信じて祈りつつ歩みましょう。

主はこう言われる

神様は目に見えないお方ですが、私たちは神様の声を聞くことができるのですよ。エッ!どのようにして...と思うでしょう。それは、聖書の言葉を通して可能なのです。今日のテキストの中に「主はこう言われる」というフレーズ(語句)が2回くり返されていますね。ここを注意深く読んでいくと、神様のお考えやお心がよくわかり、まるで肉声が聞こえてくるように、神様のお声が心に聞こえてきます。

さあ、聞きましょう

神様は天地万物を創造し、歴史を支配し、すべての権威をお持ちのお方です。神様はご自分のことを「ただわたしのみ主である。わたしのほかに救う者はいない」(43・11)と自己紹介しておられます。その主が第一の言葉を発して、バビロン帝国の滅びについての預言を、預言者イザヤを通してなされたのです。当時の人々はイザヤの預言な

どバカにして信じる人はいませんでした。この言葉どおりに約150年後の紀元前539年にペルシャ王クロスの手によってバビロンは滅ぼされ預言は成就したのです。

第二の主の言葉は、神様に選ばれた民の救いの預言です。「あなたは、さきの事を思い出してはならない、いにしえのことを考えてはならない。見よ、わたしは新しい事をなす」と主は宣言されました。ペルシャ王クロスは異邦人であるにもかかわらず、全能の神の働きにより心動かされ、捕囚のイスラエル人の帰国を命じ、しかも帰国後、主の宮を復興するようにと命じたのです。貧しい捕らわれの身のイスラエルの民たちに宮を再建する財力などどこにもありません。しかし、「新しい事をなす」と宣言された主は、荒野に道を設け、砂漠に川を流れさせるように奇跡をもってイスラエルの民を導いてくださったのです。それは、丁度、出エジプトの時のようでした。紅海が真つ二つに分かれ、その大路をイスラエル人は一人残らず渡り、その後を追ったエジプトの軍隊などはすべて海にのまれ、泡となって消え去ってしまったのと同様です。さて、エズラ記1章を読むと主の宮復興の資金がどのように備えられたかが詳しく述べられています。クロス王自らが民に財をささげよと命じ、イスラエル人は溢れるばかりの豊かな資金をもって、帰国したのです。私たちの頭では考えられない想定外の出来事です。

新しい年に新しいみわざを!

「これから起る新しいことを知らせよう。隠されていたこと、お前の知らぬことを。それは、今、創造された、昔にはなかったもの、昨日もなかったこと、それをお前に聞かせたことはない。見よ、わたしは知っていたと、お前に言わせないためだ」(48・6～7新共同訳)と主は言われるのです。こんな力強いみ声を聞いた私たちはワクワクしますね。神様は二〇〇七年の365日を毎日毎日、新創造してくださるのですから。ですから、私たちは与えられた一日一日を大切に、手をこまぬくことなく、主に励まされ、新しいみわざを期待して、主に従って歩んで行きましょう。

自由研究「ありがとう」

昨年夏休み前、中日新聞の小さな囲み記事に、小中学生に向けて夏休みの宿題が出されました。「ありがとう」という言葉を、休みの間に何度も使ってみよう。そして、夏休みの終わりに何が起きたかを報告してほしい」と。これを読んだ小5の男の子が「ステキな言葉、ありがとう」と題して自由研究をし、発表するので聞きに来てほしいと招待状が新聞社に届きました。彼は、まず自分が誰かの発表に耳を傾けました。彼は、まず自分が誰かに「ありがとう」を言った時、相手はどう対応したか、逆に「ありがとう」を言われたらどういう気持ちになったかを、休みの間中、何人もの人を相手に細かく記録し書き出したのです。その結果、「ありがとう」は、すごいパワーの詰まっている魔法の言葉だということが分かった。これからは、人を元気にする言葉をいっぱい言いたいとも...こんな素晴らしい発表でした。新しい年にあなたも挑戦してみよう。きつと新しい事が、あなたの周りに起ってくるでしょう。

♪ハレル、ハレル♪

(子どもさんびか48)



聖書 II テモテ3・10～17

テーマ 聖書に親しむ

序論

(鎌野)

12月から期題「希望に生きる」に沿って学びを続けているが、今月はクリスチャンが希望をもって信仰生活をおくるために必要な3大原則を取り扱う。第一の原則は、聖書に親しむことである。使徒パウロはその晩年、信仰深い祖母と母親の影響のもとで育ったテモテに、父親のような愛をもつてこの手紙を書いた。特に今日の箇所は、聖書が記された目的を明確に教えている。

一、苦難に勝つため

パウロは、3章前半で「苦難の時代」が迫っていることを告げた後、その苦難に打ち勝つためには、幼い時から親しんできた聖書に従うことが重要であることをテモテに訴える。パウロは第一次伝道旅行の時、ルステラに住んでいたテモテと出会い、彼とその一家を救いに導いたのだから。そして第二次伝道旅行の時に、多分20歳前後だった彼を同行させる(使徒16・1)。それから10年以上、彼はパウロと行動を共にした。パウロがルステラの町で迫害のゆえに死にそうになったことも(使徒14章)、その後の多くの苦難も知っていたが、パウロのあとに(続いてき)たのだ。(キリスト・イエスにあつて信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける)ことを、テモテは自分の経験を通して理解していたことだろう。

テモテがそれらの苦難に勝つことができたのは、

〈幼い時から、聖書に親し〉んできたからにはかならない。ここでの〈聖書〉とは旧約聖書のことである。例えば、ヨセフ物語やダニエル物語は、神に従う者にも苦難があることを示すとともに、〈主はそれらいつさいのことから、救い出して下さ〉ることも教えている。幼い時に学んだ聖書は、苦難に打ち勝つ力を与えてくれるのだ。

二、救いを得るため

9月と10月で学んだように、旧約聖書は王や預言者が信仰によって歩んだことを証言している。しかし、神を信じない人々も多くいた。そういう不信仰な人々のために、父なる神はキリストをこの地上に遣わしてくださり、信仰によって救われる道を開いてくださったのだ。パウロも、そしてテモテも、旧約聖書が〈キリスト・イエスに対する信仰によって救に至る知恵〉を与えるものであると確信していた。なぜなら、旧約聖書を読めば、ほんの数十年前に十字架につけられ復活されたイエスというお方こそ、ユダヤ人が待望していた救い主であることがはつきり分かるからだ。

福音書の記者や、パウロをはじめとする使徒たちは、イエスが神の子、救い主であることを明確にするために、自分たちの見聞したことを書き記した。それらの文書は、すでにこの時代にも、旧約聖書と同等の権威があったことが、Iテモテ5・18(福音書と申命記)やIIペテロ3・16(パウロの手紙と旧約聖書)などの中で示唆されている。そしてそれらが後に新約聖書としてまとめられ、より明確に信仰による救いを示したのである。

三、ととのえられた者になるため

聖書は、人を罪から救うだけではない。救われた(人を教え、戒め、正しくし、義に導く)。それは〈聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたもの〉だからである。(靈感を受けた)と言っても、恍惚状態になつて自然と手が動いたのではない。聖書を記した人々は、それぞれの個性をもったまま、慎重に事実を調べたり、教会の現状を分析した上で、イエス・キリストがすべての人の救い主であることを証言したのである。アダムは、神が「命の息をその鼻に吹き入れられ」たので生きた者となった(創世記2・7)。それと同様、聖霊が心に働かれたので、彼らは書くことができた。聖書の本当の著者は、神ご自身にほかならない。

だから聖書は他のどんな書物とも違っている。聖書は、神の人(主を信じた人)を(あらゆる良いわざに対して十分な準備ができて、完全にととのえられた者に)する。テモテはまさにその良い例であろう。パウロは、彼の13の書簡の内の6つで、テモテを共同著者としている。聖書に親しむ人は、「神の作品」とされ、あらゆる良いわざに間に合うように整えられるのである。

結論

新しい年、より一層聖書に親しむよう、子どもたちを指導しよう。「子ども聖書日課」などを用いて、毎日少しでも聖書を読むようになったら、何と幸いなことか。この良い習慣によって、彼らは苦難に打ち勝ち、明確な救いを得、将来の働きのために整えられた者となるのである。

研究資料

(足立 宏)

Ⅱ テモテは、ローマの牢獄^{ろうごく}で殉教の死を目前にした使徒パウロからエペソにいるテモテに宛てられた手紙。パウロは、20年以上に亘る伝道旅行の同労者の一人に遺言を伝達。3・10～17において彼は、困難な時代の到来を語りつつ、その時代にあつてみ言葉の真理にあくまで忠実であり続けるように命じる。その確信の根拠は聖書そのもの。

テキスト

14 しかし、あなたは 偽教師たちとの対比(3・10、4・5、Ⅰテモテ6・11、テトス2・1)。信仰の破船者(Ⅰテモテ1・19)や真理から外れて信徒を欺く者(2・18)の存在を認めつつも、テモテには自分が学んできた拠り所にとどまり続けることを指示。10～17節において唯一命令形(原文で記されているのは、この14節の **とどまっていなさい** だけ。パウロはテモテにどのような逆境の中でもみ言葉の真理に立ち続けるよう断固主張。その理由は、**あなたは、それをだれから学んだか知っており** と言うこと。テモテは、多くの証人(2・2)、パウロ自身(3・10～11)、そして母と祖母(1・5)から多くの良き影響と感化を受けた。テモテはみ言葉の真理を抽象概念ではなく、信頼できる信仰の先輩の後姿を通して伝達されてきた。

15 続けて、とどまる理由が記される。それは、幼いときから親しみなじんできた聖書そのものによってである。偽教師は、自らと他者に損失を与えるため聖書を用いてきた(Ⅰテモテ1・6～7)。しかし聖書は、キリスト・イエスに対する信仰によって

救に至る知恵 人間に与える書物。パウロはここで聖書が主張する支配的な目的を提示している。これはまた主イエスが述べている内容の反映でもある(例、ルカ24・25～27、44～47、ヨハネ5・39、46)。パウロが語るユダヤ人への説教も同様(使徒17・2～3)。**救に至る知恵** は一般教養ではなく、あくまでキリストがもたらした救い(罪と死と滅びから)を与えるもの。

この救いはパウロが彼の手紙の至る所で述べているように、キリスト・イエスにある信仰により授けられる(ローマ3・22、ガラテヤ2・16、ピリピ3・9、エペソ2・8)。信仰は救いの手段であり方法。そして信仰は、キリストに対する信頼として積極的な意味を含んでいる(参照Ⅱテモテ1・1、10、Ⅰテモテ1・1～2)。私たちを賢明にして、救いを求めさせる点で聖書に比肩できる書物はない。赦しと人格的な聖潔^{きよめ}に導き、神に対して賢明な信頼を引き出すのが聖書の至高の働き。

16 ここでパウロは、聖書の神的起源とその有用性を教えている。聖書の最大の意義は、それが神によって語られた神ご自身の言葉であることに根拠づけられる。そして究極の著者は、聖霊なる神である。**聖書は、すべて** 直接的には旧約聖書全てを指すが、その後、新約聖書が完結して、現代の私たちにとつては旧約39巻、新約27巻が正典として与えられている。**神の靈感を受けて**(セオプニューストス)とは、「神が息をすると表現されるのが適切であろう。ここには神の創造的な活動が表されている。パウロは、聖書の形成と著述において神の活動的な作用を全面的に信頼している(参照Ⅱペテロ1・20～21)。

続けてパウロは聖書の特別な有用性について断言している。**有益** とは、実的な恩恵をもたらすという意味。**教え** 教授すること。すなわち、み言葉はその内容によって人を教授する。これはテモテの主要な責任。彼はみ言葉を説き明かしつつ、神の民に健全な教えを提供する(参照Ⅰテモテ4・6、13、16、6・3)。**戒め** 叱責、非難すること。これはテモテの働きのもう一つの側面。すなわち彼には聖書を用いて偽教師やその教えの誤りをあばくことが求められている。**正しく** 訂正する、正しく向けること。この言葉は新約においてここにのみ登場。倫理的な側面の指導を意味すると考えられる。**義に導く** 義しさを教育、教授すること。積極的な面での訓練のこと(参照2・25、テトス2・12)。聖書は思弁や歴史探究、また人間の好奇心を満足させるために与えられているのではない。信仰者が実際の信仰生活、教会生活において、成長・成熟するために有益なのである。

17 聖書が持っている有用性の目的が示されている。**神の人** 教職者及びみ言葉に仕える奉仕者は、聖書の真理伝達のためにまず自らが聖書によって整えられる必要がある(参照2・21、テトス1・16、3・1)。

参考図書 柴田俊彦「テモテへの手紙」『実用聖書注解』(いのちのことば社)、T・C・オーデン(岩橋常久訳)「テモテへの手紙1、2」テトスへの手紙『日本基督教団出版局』、Fee, G.D., 1 and 2 Timothy, Titus (Hendrickson), Knight, G.W.III., Commentary on the Pastoral Epistles (Eerdmans).

聖書
タイトル
暗唱聖句Ⅱテモテ3・10～17
聖書に親しむ

聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。

目 標

Ⅱテモテ3・16
神の言葉である聖書をしつかり読もう。

導入

(松浦み)

皆さんは、聖書を持っていますか学校の校門などでもらったギデオンの聖書をもっている人もいるかもしれませんが。ギデオン協会の方々は、人々をキリストの救いに導くことを目的として、学校、ホテル、病院、看護師、警察官、受刑者などに聖書をプレゼントしておられる方々です。なぜ、このように多額のお金をつぎ込んで聖書配布に励んでおられるのでしょうか？ それは、聖書が素晴らしい書物であり、人は聖書によってのみ、神様とその救いについて知ることができるからです。ですから、この素晴らしい聖書を一人でも多くの人に読んでほしいと、日本だけでなく180か国で活動され、81か国の言語に訳された聖書がギデオンの会員の手によって配布されています。皆さんの中から、将来ギデオンの働きに加わる人が起こされたらなんと素晴らしいことでしょう。

聖書は神の言葉

聖書は神の言葉であり、特別に神様がご自身について語っておられる書物です。そして聖書は、

私たちの信仰と生活の唯一の誤りのない規準です。さて、暗唱聖句に、聖書はすべて神の靈感を受けて書かれたものとありましたね。聖書は旧約39巻、新約27巻、計66巻で出来ています。(3×9＝27旧・新合わせて66と覚えると、忘れないよ！)この聖書は、一人の人が書いたのではなく、モーセを初めとする王や預言者たち、お百姓の預言者も書いているよ。イエス様の弟子たち、医者や漁師、税務署の職員など、それはそれは様々な人々が、別々の場所、いろいろな時代に千年以上もかかって書き上げた、世にも不思議な書物です。それらを書いた人々は、会議やメールで互いに連絡をとるというようなことを、何にもしなかったのに、神のひとり子イエス・キリストを指し示し、証しする書として書かれています。『66巻のキリスト』というホッジキン著・笹尾鉄三郎師訳の本がありますが、聖書のどこを読んでも、金太郎アメが、どこをかんでも金太郎が出てくるようにイエス様のことが証しされているのです。なぜでしょう。それは、人々が神の靈感を受けて書いたからです。ですから、聖書の本当の著者は聖霊ご自身です。

聖書は私たちを整える

暗唱聖句に、聖書は人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益であるとありますね。この手紙の送り主はパウロ先生ですが、読み手の弟子テモテにむけて、「あなたは、幼い時から、祖母ロイス、母ユニケのもとで育てられ、聖書に親しんできた。その聖書が今のあなたを形作り、支え導いてくれているのだよ」(1・5)と語っています。彼は、まれに見る人格、品性、知性、三拍子そろったキリストの良き証し人であり、パウロ先生の片腕で

した。聖書は、人を罪から救うだけではなく、救われた人があらゆる良いわざに對して、十分な準備ができて、完全に整えられた者となり、良き証し人、神の作品となつて、この世に輝いて生きられるようにするのです。パウロ先生は別の手紙で「あなたがたはキリストの手紙である」(Ⅱコリント3・3)と言っています。多くの人は聖書を知りませんが、人々はあなたを見て、あなたの行動と言葉を読んでキリストを知るのだと書いています。

聖書はいのちの糧

聖書は、いのちの糧であり、また、魂の薬ともいえます。ですから、健康な身体を持つため、バランスよい食事を食べるように、心の栄養、魂の栄養を持つため、聖書を読む必要があるのです。健康な、生き生きとした、輝きと喜びにあふれた心を持つていないと、ちよつとしたことで、あきらめたり、つまずいたり、悩んだりします。新しい年、聖書をしつかりと読み、神様の声を聞きつつ歩む日々を送りましょう。子ども聖書日課を身近なところにおいて、少しでも言葉に触れる工夫をこらし活用しましょう。

最後に、聖書を読み抜いたおばあさんのお話をしましょう。この人はM牧師の提案する「100日聖書通読」を忠実に実行した人です。残念なことに80日通読の手前で重い病気になり79日という記録を残しました。一年に3回聖書全体を通読し、実に26年間毎朝読み続けました。無学な人でしたが、聖書に教えられ、戒められ、正しくされ、神の人として素晴らしい証しの日々を過ごしておられます。あなたも通読に挑戦してみませんか？
♪聖書めいもくずくし♪ (子どもさんびか19)



聖書 エペソ6・10～20 テーマ 祈りの生活

序論

(鎌野)

クリスマスチャンが希望をもって信仰生活を送るために必要な第二の原則は、常に祈ることである。聖書が神から私たちへの語りかけだとすると、祈りは私たちから神への語りかけと言えるだろう。両者がそろって、初めて神と人とのコミュニケーションが成り立つ。パウロは、教会とは何かをテーマとするエペソ書の末尾で、祈りがどれほど大きな力をもつかを熱く語るのである。

一、悪魔と戦う力

〈最後に言う〉とは、本書の結論を導く表現である。教会は主のからだであるからこそ、その戦いは〈血肉に対するものではなく、…悪の霊に対する〉ものである。だからパウロは、人間的な能力に頼るのではなく、〈主にあって、その偉大な力によって、強くなりなさい〉と命じる。〈主にあって〉とは、パウロが何度も用いている句であり、主イエスと一体化することを指している。

祈りは、動き回ることではない。一人の場合でも兄弟と祈る場合でも、目に見えないお方の前に出て、そのお方にありのままを申し上げることである。悪魔の策略は非常に悪賢く、人が太刀打ちできるものではない。霊的な敵に立ち向かうためには、霊的なお方に寄り頼み、一つとなる以外に、どんな方法があるのか。悪魔と戦うためには、祈りこそが最善の手段なのである。

二、自分を守る力

このとき獄中にいたパウロは、武装した兵士たちの姿を何度も見ていた。それにヒントを得たのだろう。彼は、霊的な戦いに勝つために、〈神の武器で身を固め〉、〈神の武器を身につけ〉るように訴える。二度繰り返すほど、重要なのである。そして、真理の帯・正義の胸当・平和の福音の備え(靴)・信仰のたて・救いのかぶと・御霊の剣という6種類の武器を挙げる。このうち、剣以外の5つが防御用であることに注意したい。

悪魔は手を変え品を変え、私たちを誘惑してくる。特に牧師とか熱心な信徒をねらい打ちにするのである。悪魔の3本槍といわれる、金・名誉・異性が、どれほど多くのクリスマスチャンの命を奪ってきたことか。5種類の防具で身を固めても、具体的な行動は、結局祈りしかない。主イエスが教えてくださったように、「我らを試みにあわせず、悪より救い給え」と祈るばかりである。

しかし主イエスも、荒野で三度、悪魔の試みにあわれた(マタイ4章)。そのたびに聖書の言葉を引用いられて応戦された。これが攻撃用武器の〈御霊の剣、すなわち、神の言〉だ。先週学んだ「聖書に親しむ」ことの大切さが分かるだろう。

悪魔の攻撃から身を守るためには、〈絶えず祈と願いをし、どんな時でも御霊によって祈り、そのために目をさましてうむことがな〉いようにする必要がある。油断は禁物だ。「昨日1時間祈ったから、今日は祈らなくても良い」と思ってはならない。悪魔の誘惑だと感じたなら、どんな時でも、「主よ、助けてください」と叫ぼう。

三、聖徒を助ける力

パウロは、自分のためにだけでなく、〈すべての聖徒のために祈りつづけなさい〉と命じる。さらに、〈わたしのためにも祈ってほしい〉、〈大胆に語れるように祈ってほしい〉と、二度も繰り返して祈りの応援を求めている。あのように偉大な使徒パウロであっても、兄弟たちに祈ってもらわねば、福音宣教はできなかったのである。

祈りは、どのような武器にたとえられるだろうか。小島伊助師は、「祈りは飛道具、今なら爆撃力」と言う(『全集』6巻44頁)。たといその場になくても、遠くからでも、悪魔と戦っている人々のために援護射撃をすることができるようから、そのように言えるのだろう。主のからだである教会では、このような祈りが不可欠である。祈ってもらわなくても大丈夫だという人がいるとするなら、その人は傲慢だ。だれかが自分のために祈ってくれている。そして、自分もだれかのために祈っている。このような相互の祈りによって、「キリストを基として、全身はすべての節々の助けにより、しっかりと組み合わされ結び合わされ」た教会が形成されるのである(4・16)。

結論

祈りによって、私たちは主イエスと豊かな交わりをもつことができる。主と一つにされる経験をすることができる。またそれと共に、主にある兄弟とも一つとされる。このとき、悪魔はもはや手出しすることはできない。信仰生活における祈りの重要性を強調しすぎることはないだろう。

研究資料

(石田)

テキスト

10 強くなりなさい 主により頼みながら、その偉大な力によって強められ続けるべきこと。現時制であるから、行為の継続を表している。

11 神の武具 神が信仰者に用意しておられる霊的武器で、14節以下に6つ、祈りを加えれば7つ挙げられている。これらはローマ兵の防具や武器に相当しており、霊的武器のたとえである。当時のローマ支配地において、武装したローマ兵は目につく存在であつたと思われる。**悪魔の策略** は時を選ばないので、信仰者は「キリスト・イエスのよい兵卒」(Ⅱテモテ2・3)として、いつでも神の武具を意識的に身に着けておかなければならないわけである。信仰者にとってこの世は、魂をめぐる悪魔との霊的戦場でもある。

12 血肉に対するものではなく 悪魔は自分の目的のために人間を利用することがあるが、だからといって信仰者の戦う相手は人間(血肉)ではない。**もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者** 悪魔とその支配下にある悪霊たちの身分を表すものらしい。悪魔を頂点とする悪霊たちの階級社会をイメージさせる。

13 よく抵抗し、完全に勝ち抜いて 悪魔とその勢力は攻撃の手をゆるめないので、信仰者が抵抗しなければ後退を余儀なくされる。いやおうなしに霊の逆風の中に立たされている。信仰者は「主にあって」抵抗し、戦うことによって「堅く立つ」ことができる。さらに神の武具を身につけて、聖

霊の追い風によって完全に勝ち抜くことができる。

14 立って真理の帯を腰にしめ 「立って」は戦闘準備に入ることであり、武具を身につける前に裾の広がった当時の服にしっかりと帯を締めなければならなかった。信仰者にとって十字架と復活による救いという「福音の真理」(ガラテヤ2・5)を自分のものにしておくことは第一の武器である。**正義の胸当てを胸につけ** 単なる自分の正義感では、悪の勢力の前には無防備に等しい。しかし主から受けた義認の恵みで対抗するならば、彼らのいかなる告発もはね返し、魂に食い込むことはない。彼らの攻撃も軍艦の横腹に豆鉄砲である。

15 平和の福音の備えを足にはき ローマ兵は鉞の打たれたサンダルをはいて足を防衛したということである。神との平和、そして人との平和という福音を伝える信仰者の足には、神の守りと助けがある。

16 信仰のたてを手に取りなさい この盾は相手の剣を防ぐ小盾ではなく、槍や矢の攻撃から全身を防ぐ大盾をイメージしている。木製の盾は表面を皮でおおい、火矢をすぐに消せるようにできていたという。**悪しき者の放つ火の矢** つまり信仰者を主から引き離そうとする悪魔の攻撃を無力にすることができるとは、主に對する堅い信頼である。

17 救のかぶとをかぶり 救われているという確信と、御霊の証しで魂を守ることができる。

御霊の剣、すなわち、神の言を取りなさい み言葉を用いる時、御霊が著しく働いて攻撃用の武器となる。み言葉を適切に用いるなら、悪の勢力の

攻撃を十分防ぐだけでなく、追い散らすことができる。救霊も育成も霊の戦いであり、み言葉によって敵の領地を切り取ることである。

18 絶えず祈と願いをし ここで祈りも神の武具であると表現されているわけではないが、前後のつながりからそのように解釈できる。さしずめ祈りは遠くに届く矢のようなものである。祈りは悪魔の攻撃から身を守るだけでなく、こちらから攻撃して、霊の働きに邪魔をされないようにすることができるとは、**どんな時でも御霊によって祈り**

内なる御霊の執り成し、あるいは発動によって祈ること。**すべての聖徒のために祈りつつけなさい** キリストのからだであるクリスチャンが、お互いのために祈り続けることは、教会形成と福音の前進に大きく貢献する。

19 大胆に福音の奥義を明らかに示しなさい わたしのためにも祈ってほしい パウロは牢に入れられ、行動の自由を奪われていることを何の障害とも考えていない。まさに「時がよくても悪くても」み言葉を宣べ伝えることに心を奪われていたと言わなければならない。

20 わたしはこの福音のための使節であり パウロは牢獄につながれていながらも、福音を伝える神の全権大使であるという自覚と誇りを失わなかった。**鎖につながれているのであるが** パウロの語った神の言葉は鎖につながれることなく、聖霊によって記録され、全世界に告げ広められているとは、痛快なことである。

参考図書 『パークレー聖書注解』、『新聖書注解』、『ティンデル聖書注解』など。

聖書	エペソ6・10～20
タイトル	祈りの生活
暗唱聖句	すべての聖徒のために祈りつづけなさい。エペソ6・18
目標	奥深い祈りの生活を送ろう。

導入

(松浦み)

先週、聖書はいのちの糧だと学びましたね。祈りは、呼吸であり、神様とお話することです。私たちは汚い空気を吐き出し、新鮮な空気を吸って生きています。そのように、祈りをするこ

祈りの時は楽しい！

新聖歌190番に、「静けき祈りの時はいと楽し」という聖歌があり(説教者は実際に歌ってください)、多くの人に親しまれています。このメロディを聞いたことある人が、この中にいるかもしれませんね。この歌には、祈りがどんなに素晴らしいものかが歌われています。私たちの毎日の生活の中に、困ったなあ、どうしようという悩みや困難、またさまざまな誘惑が襲ってきます。そんな時、静かに祈りの時を持つと不思議と心は平安になり、神様が力づけ、慰めてくださるので、祈りの時は楽しいのです。皆さんは祈ったことがありますか。どんな時に祈りますか。祈りはいつでも、どこでもできます。お家や学校で、遊んでいる時や塾に

行く時、病気やテストの時、ピアノの発表会やスポーツの試合の時、どんな時でもOKです。

祈りはこの世で最強の武器

悪魔の策略に対抗するため、神の武器を身につけなさいとパウロ先生は二度もくり返して言っています。神の武器とは、真理の帯、正義の胸当、平和の福音の備え(靴)、信仰の盾、救いのかぶと、御霊の剣(神の言)という6種類の武器です(絵に書き表すとよい)。しかし、どんな武器で身を固めても祈りがなければ、それらは用をなさないので。す。ですから、どんな時でも御霊によって祈り、そのために目をさましてあきらめることなく、すべての聖徒のために祈りつづけなさいと勧めるのです。旧約時代に、イスラエル人がアマレク人と戦いをした時、指導者モーセが祈りの手を上げるとイスラエルが勝ち、モーセが手を下げるとアマレクが勝つという出来事がありました(出エジプト17・11)、その事を思い起こさせるパウロ先生の祈りの勧めの言葉ですね。

祈りは他者を助け、みわざを起こす力

祈りは素晴らしい力を持つていることがよくわかりましたね。さらに、素晴らしいことは、自分のためだけでなく、他者のために祈ることによって、神様のみわざが押し進められるということです。ですから、パウロ先生は大伝道者で、頭もよく、何でも出来る力のある方でしたが、「私のためにも祈ってほしい。み言葉を大胆に語れるように祈ってほしい」と懇願したのです。本当の祈りの力を知っているからです。皆さんも、教会の牧師先生のために、教会学校の先生のために祈りましょう。神様は祈りに応えて、今よりもっと素晴らしい

しい教会へと成長させてくださいます。また、宣教師の先生方のためにも祈りましょう。私たちは誰もが宣教地に出かけられませんが、祈りを通してその働きに加わることが出来ます。私たちが日ごとに接する家族や友だちや学校の先生など覚えて祈る者となれたら、あなたの周りには神様の不思議な恵みのみわざが広がっていくことでしょう。

とりなしの祈りの証し

最後に、とりなしの祈りの証しをします。ドウロス号という世界中で福音を宣べ伝えている船のことを知っていますか？ このドウロス号が以前名古屋港に寄航したとき、ドウロス号の生みの親であるジョージ・バウアー師が救いの証しを語られました。彼は高校時代、学校きつての不良のリーダーでした。16才のある日、ニューヨークのマディソン・スクエア・ガーデンで開かれた伝道集会でビリー・グラハムのメッセーシジを聞き救われました。ニュージャージー州北部の高校へ戻ったジョージの証しにより、一年以内に約200名の高校生が救われ、荒れた学校はキリストを証しする場と変えられたのです。彼はすぐ夏休みを利用し、メキシコへ友人らと出かけ聖書の配布をして伝道に励みました。やがて大学進学後、ムーディー聖書学校に転校し世界宣教へと立ち上がりました。彼は熱情を込めて語るので。どうしようもない不良の私が救われるために、学校の近くに住む老婦人がとりなしの祈りを何年もささげていたのです。老婦人は心痛めつつ、「神様、この中からあなたのために働く器を起こしてください」と。♪主の手足になろう♪

(子どもさんびか「ホーリネス」86)



聖書 ヘブル10・19、25

テーマ 集会出席

序論

(鎌野)

クリスチャンが希望をもって信仰生活を送るための第三の原則は、休まず集会に出席することである。礼拝だけではなく、祈禱会や家庭集会などにも積極的に集いたい。一人で聖書を読み、祈るのも大切だが、同じ主を信じる人々と一緒にそれらをするにも重要な意義があるからだ。今週のテキストは、集会を軽んじていたある人々の生き方とは違って、信徒は共に集うべきことを強く勧めている(25節)。では、一緒に集まったとき、何をすべきなのか。文脈にそって、3つの点から考えてみよう。

一、信仰をもって神に近づく

ヘブル書の著者は、前段で、キリストのからだがささげられたことによって罪の贖い(あがなひ)が完成し、もはやいけにえは不要であることを述べた。それゆえに、「わたしたちは…はばかることなく聖所にはいることができる」。また、主の十字架のときに聖所と至聖所とを隔てていた幕が裂けたので(マルコ15・38)、大祭司以外の者が入れなかつた至聖所にも行ける(といっても、建物としての聖所や至聖所のことではなく、神のみまえのことだが)。さらに、人間の大祭司以上の「神の家を治める大いなる祭司」が、その血によって私たちをきよめてくださったのだから、「信仰の確信に満たされつつ、みまえに近づ」くことができるようになった

のである。

以上の説明の背景には、多くの人々が集っていた神殿での礼拝が意識されていることは明白だろう。旧約の民がしばしば神殿に集っていたように、主イエスを救い主と信じる新約の民は、贖罪信仰を堅くもって、共に神のみまえに近づくのだ。集会出席は、単なる人の集団に加わることではない。罪を洗いきよめられた者たちが一つ心になって、聖なる神のみまえに近づくことである。

二、望みを告白する

信仰は望みを生み出す。主イエスの贖いのゆえに罪が赦された(あがなひ)と信じる者は、将来、神の都に導かれる望みを持つことができる(11・16)。「約束をして下さったのは忠実な神である」ゆえに、この望みは確実だ。しかし、現実の世界では様々な試練がやってくる。その試練に打ち勝つためには、その望みを告白し続けることがどうしても必要になってくるのである。新共同訳では、23節は「公に言い表した希望を揺るがぬようしっかりと保ちましよう」と訳されている。「公に言い表す」とは、集団の中での行動だ。個人的にはなく、集会の中で、皆と一緒に言い表すのである。

主イエスを救い主と信じる者は、天国に向かって歩んでいる。しかしこれは一人旅ではない。仲間と共に、希望を共に告白しつつ進んでいくのだ。ちょうど旧約時代、イスラエルの民が「都もうでの歌」を歌いつつ、エルサレムをめざして進んでいったように(詩篇120・134篇)。共に集うことは、同じ望みを持つ者にとつて不可欠である。

三、愛と善行を励む

信仰と希望によって歩んでいるなら、そこに愛と善行が実現するのは当然であろう。一人一人は弱い者であっても、「互に励まし」あうことによつて、強められるのだ。燃えている薪でも、たった一本だけならいつの間にか消えてしまう。しかし、数本が一緒に燃えているなら、互いの熱を与えあつて、最後まで燃え続ける。愛と善行は、互いの信仰を強め、望みを明確にしていく。共に集うときに他の人を励ますなら、それは自分自身を豊かに成長させることになるのである。

「かの日が近づいているのを見て、ますます、そうしようではないか」とは、主イエスが再びおいでになる時が近いことを意味している。その時、私たちはどう生きたかが問われる。主イエスから、「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」(マタイ25・40)と言われるよう、「愛と善行とを励むように互に努め」ようではないか。

結論

たとい大人であっても、たった一人で聖書を読み続け、祈り続けることは難しい。いわんや、子どもたちをや、である。教会は、また教会学校は、信仰と希望と愛を保ち、それらをさらに豊かにするために、神が与えてくださったすばらしい機関である。中学生、高校生になると、教会に來なくなる場合が多い現実の中で、何とか知恵を出し合つて、彼らが集会に出席し続けるような方策を考え祈つていくのではないか。

研究資料

(石田)

テキスト

19 兄弟たちよ。…わたしたちは…みまえに近づこうではないか(22) クリスチャンが一人で神に近づくというのではなく、ほかの兄弟たちと一緒に近づくように勧められており、クリストのからだなる教会の礼拝のことが意識されている。これは25節の「集会をやめることはしないで」につながっている。はばかりことなく、確信を持って、大胆に。当時、神殿の至聖所に入ることができたのは、大祭司だけであり、それも年に一度限りで決まっていた。だからヘブル人(ユダヤ人)が至聖所に入るように勧められても、はばかりで、畏れ多く思われたに違いない。イエスの血によって…聖所にはいることができ 至聖所に入る、つまり神との親しい交わりを持つためには、旧約時代の儀式による外側のきよめではなく、主イエスの十字架による贖いという功績により頼むことだけが必要である。

20 彼の肉体なる幕をとり 幕とは、至聖所を聖所から隔てる幕のこと。旧約時代、大祭司以外は、この幕を通って神に近づくことは許されていなかった。しかし主イエスが十字架で死なれたとき、この幕は裂け、主イエスが恐れなく神に近づくことができる道を開いてくださった。新しい生きだ道 神に近づくために新しく開かれた道とは、律法の行いによる自分の義ではなく、主イエスの贖いにより頼むことである。

21 神の家を治める大いなる祭司 祭司職とは、

人を神に近づける仕事である。主イエスは神の家、つまりクリストのからだなる教会の大祭司として、人間を神に近づける職務を遂行しておられる。私たちはこの方に執り成していただくことができる。

22 心はすがれて良心のつがめを去り 祭司は任職の際、いけにえの血をその身と衣服に注がれて、聖別されなければならなかった(出エジプト29・21)。そのことを引用して、クリストの血によって良心がきよめられることを言っている。からだは清い水で洗われ 祭司は奉仕の前に、神殿の水盤の中からだを洗わなければならなかったことが意識されている(出エジプト29・4、レビ16・4)。しかし、より一般的には、バプテスマによる罪過の洗いが考えられている。まごころをもって信仰の確信に満たされつつ まことのいけにえとなられた主イエスの贖いは、良心をきよめ、神と人とに仕えるために整える(9・14)。

23 約束を下さったのは忠実な神であるから 私たちの信仰生活は、自分の信仰の確かさではなく、神の真実の確かさに土台を置くべきである。神の約束は決して変らない。わたしたちの告白する望み 主から与えられた望み、つまり主と共に、内におられることや永遠のいのちの希望は、事あるごとに口に出し、人にも語ることが勧められている。

24 愛と善行とを励むように互に努め 「集会」と訳されているが、「一緒に集まる」ことが元の意味である(エピシユナゴーは、会堂・シナゴグの関連語)。礼拝をはじめとするクリスチャンの集いは、牧師と会衆という関係と共に、クリス

チャンが一緒に集まるという関係が見落とされてはならない。「励まし」これは「警告する、戒める」という意味を持つ。一緒に集まることは、自分のために必要なだけでなく、ほかの人を愛によって励まし、あるいは警告し、あるいは自分が励まされるためにも必要である。クリスチャンが健全であるためには、ほかの人の助けがいる。24、25節に「互に」という言葉が繰り返されていることに注意したい。

25 集会をやめることはしないで互に励まし ここに何らかの理由で「集会をやめる」人々のいたことが明らかにされている。文脈から判断すれば、ほかの人の関わりを避けるためであろう。当時の集会は、一般の家屋で、少人数で、毎日のように持たれ、生活を共にするようなものだったと思われる(使徒2・44、46)。そこでは霊の交わりだけで終わることはなく、食事を共にし、互いの生活を助け合うことが行われていた。そのような集いで人との関わりを避けようとすれば、集会そのものをやめることしかなくなるわけである。それは魂の安全を揺るがせることになる警告されている。かの日が近づいているのを見て、ますます、そうしようではないか 主の再臨による世の終わりが近づいているという時の意識、健全な緊張感、一緒に集まって、互いに励まし合うことの動機となる。

参考図書 『新聖書注解』、『ティンデル聖書注解』、『パークレー聖書注解』、『ヘブル書に学ぶ』(G. コツカリル著) など。

聖書 ヘブル10・19～25
 タイトル 集会出席
 暗唱聖句 集会をやめることはしないで互に励まし、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではないか。ヘブル10・25
 目標 神様にお会いする集会に励もう。

導入

(松浦み)

みなさんの教会はどんな教会ですか？ 鉄筋コンクリートのがつしりした教会ですか、木造の教会ですか、またビルの一室を借りての教会ですか、普通のお家の教会ですか。教会には、いろんな大きさや形があります。でも、どの教会も同じように賛美を歌い、お祈りし、聖書のお話を聞き、献金をささげ、神様を礼拝しています。

神と共に歩む者の三原則

私たちが神と共に歩むためには五つの大切なことがあります。①聖書を読むこと ②祈ること ③教会の集会に出席すること ④献金をささげること ⑤他の人に証しすること 中でも聖書を読む、祈る、集会出席は、欠かすことのできない大切な三原則です。もし、これらがとどこおるなら健全な元氣な信仰生活を送ることはむずかしいと言えるでしょう。新年を迎えて私たちは、聖書を読むこと、祈ることを学んできましたね。今日は集会出席について、一緒に学び考えてみましょう。

集会出席の大切さ

暗唱聖句を思い出してみてください。もし、集

会出席をやめるなら、私たちがどんな素晴らしい信仰をもっていたとしても、その信仰の火は弱くなり、ある場合は消えてしまうでしょう。また反対に、たとえどんな小さな信仰の火であつたとしても、集会に出席し続けることを通して、その火は燃やされ、また力が増し加わり互いに影響し合つて燃えつづけていくことができるのです。ですから、集会に出席することは、あなたにとつても他の人にとつても、とても大切なことです。

集会出席して何をやるのか？

私たちは集会を守るために教会に集いますね。多くの人は、十字架のついた建物を教会だと思つています。しかし、教会は建物のことをいうのではなく、神様が呼び出してくださつた人々の群れを指しています。教会はイエス様を頭とするキリストの体であり、クリスチャンはその肢体なのです。ある人は手であり、足であり、目であり、耳なのです。ですから、私たちクリスチャンは、私たちを呼び出してくださつた神様の下に集まり、集会を開いて、互いの信仰の望みを告白しつつ、励ましあつて生きていくのです。それと共に、主の再臨が近いことを覚え、愛と善いわざに励み、声をかけ合つて、共に主の日を待ち望むのです。

集会出席に工夫を！

部活や塾、お稽古ごとなどで、聖日礼拝出席は大変困難な現代社会ですね。ある人は、日曜日に試合のある運動部を避けて、文化部で学生時代を過ごす人もいます。しかし、サッカー選手のピスマルクのように堂々とクリスチャンとしてスポーツ界で証しの生活を送っている人もいます。一つ

一つを取り上げるなら、解決が難しい現実になつてしまします。しかし、集会出席を大事なことで心にかけて、教会の先生も子どもたちも、それぞれが工夫をこらし祈りつつ知恵を出し合うなら、神様はふさわしい助けを与え、集会出席を可能としてくださるでしょう。

聖日厳守を貫いた証し

最後に聖日厳守を貫いたN子さんの証しをしましょう。中3の修学旅行企画委員だったN子さんは準備をしながら一つの決心をしました。旅行の日程は金、土、日。「私は聖日を守るため修学旅行に行かない」と担任に申し出ました。聞き入れられません。親も学校に呼び出されて「親の信仰を強制するのか。これは学校教育の一環なのだ」とお叱りを受けました。「いいえ、両親共々N子さんがこんな決心をしていることは知りませんでした。しかし、彼女がそこまで決心しているならどうぞ彼女の心を大切にしてください」とお願いしました。すると、金、土は学校に来て校長室で勉強しなさいということで許可がおりました。N子さんは校長室で二日間勉強し、日曜の夕には帰ってくる友人たちを駅に迎えに行きました。保護者に混じつて迎えにきているN子さんを見つけた友人らは、手に手にお土産をもつて駆けつけました。自分が旅行で買つて来るよりたくさん山のようなお土産をかかえて家に帰ってきました。次の日の月曜日は休日だったので、友人と先生方のためにお礼にと、60個のケーキを焼いて、火曜の朝元気に登校しました。聖日厳守を貫いた彼女は、今も輝いた信仰生活を送っています。

(こどもさんびか74)



聖書 ローマ12・1～2 テーマ 喜びの礼拝

序論

(鎌野)

先週学んだように、教会出席はクリスチャンにとって不可欠なことである。では、教会ではどんなことをするのか。これが今月の単元「教会生活」の内容だ。最初に礼拝を取り上げてみよう。ローマ書の著者パウロは、11章までに神の救いのご計画を教理的に述べてきた。そして12章から、だからこそ救われた者はどう生きるべきかを実践的に示す。その冒頭に記されているのが礼拝である。礼拝には、対神的な面と対人的な面があるが、今週は前者を中心に学ぶ。神との関係が整えられてこそ、人との関係も健全になるからである。

一、からだをささげる

旧約時代においては、羊や牛などをほふり、供え物としてささげることが礼拝の重要な要素だった。パウロの時代にもエルサレムの神殿ではそのような儀式がなされていた。しかし彼は、動物ではなく、「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい」と勧めている。先週学んだように、キリストご自身が完全な供え物となってくださったので、もはや動物は不要となった。信仰者のからだこそ本当の供え物で、それは全て、神に属するものだ。だからそれをきつぱりとささげることが、「なすべき霊的な礼拝である」。(なすべき霊的な)と訳されている原語は、合理的とか当然とかいう意味があるこ

とに注意したい。クリスチャンであるなら、たとい一部分でも自分のものとして残しておくのは、不合理な、筋の通らないことなのだ。

教会の礼拝では、賛美、祈り、聖書朗読、説教、聖餐式、献金など、様々なことがなされる。しかし、その根本にあるのは「からだをささげること」、即ち、献身である。信徒も牧師も、自分の全身全霊を主の前に投げ出してこそ、神に受け入れられる礼拝となることを忘れてはならない。

二、造りかえられる

自分のからだをささげた者は、もはや自分の好きなように生きることができない。「自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、…もはや自分自身のものではない」からである(Ⅰコリント6・19)。だから、「この世と妥協」せず、この世とは違った、またそれまでの自分の生き方とは違った、新しい生き方をすることを決心するのだ。それが、「心を新たにする」ということにほかならない。世の中の人々の行動を見てそれに倣うのではなく、内住の聖霊の導きに従って生きていくのである。

そのように生きるなら、どのような人も「造りかえられ」る。(造りかえられる)との原語は、主イエスの変貌山での記事にも用いられており(マルコ9・2)、目に見える姿が変えられていく有様を暗示している。しかもこの語は受身形で、内におられる聖霊がなしてくださる神的なみわざを意味する(Ⅱコリント3・18)。主を礼拝することによって、確かに人は変えられるのだ。

三、わきまえ知る

新しい生き方は、突然できるようになるわけではない。(何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知る)ことによって、はじめて可能になる。プロテスタント教会の礼拝で、何よりも説教を重視するのは、まさにこのためだ。神の御旨を十分に理解するために、聖書全巻に耳を傾けるのである。だから説教は、人の思想の発表や社会評論であってはならない。神はどのようなお方であり、人に何を求めておられるかが明確に語られることこそ、説教で最も大切なことである。

礼拝において、私たちはみ言葉の説教を喜んで聞いているだろうか。神が一人一人に与えようとしておられる行動の指針として、受け入れているだろうか。礼拝は儀式ではない。生きた神からの語りかけを注意深く聞き分け、その週、どのように歩むべきかを熟考する機会である。

結論

礼拝は、日曜日だけのものではないことが理解できただろうか。礼拝は毎日毎日続いている。神に身をささげた者は、神の御旨を知ることが喜びとし、日々造りかえられていく。このようにして、人と神との間の関係が整えられていくことは、教会生活の原点である。しかし、教会生活はそれだけのものではない。同じ主を信じる他の兄弟と共に礼拝をささげることの大切さも忘れてはならない。そして、礼拝によって与えられた交わりは、教会生活のすべてに広がっていくのである。

研究資料

(石田)

テキスト

1 そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める 11章までをすべて神のあわれみであると言っており、それに応答するためにはどう行動すればよいかを以下に勧めている。1節と2節で行動原理を提示している。「キリスト教道徳の根底」(内村鑑三)、「キリスト者生活の基礎」(小林和夫)とも言われる。それはひとこと言えば、神にからだを献_{けん}げて生活することである。あなたがたのからだを…ささげなさい 旧約時代の献げものは、家畜のいけにえであつたが、新約の今はクリスチャン自身の「からだ」であると言う。信仰者のからだは、もはや罪のためではなく、神のための道具である(6・13)。ただ頭だけ、魂だけでなく、具体的にからだをささげるのである。ギリシャ人はからだを霊より劣るものと見たが、聖書はからだを義の武器と見る。「神は物質を好みたもう」(C・S・ルイス)。(ここにはレビ記の犠牲、特に燔祭(焼き尽くすいけにえ)に関連して述べられている。罪を贖_{あがな}われたクリスチャンのからだは、主イエスの型である十字架の祭壇に置かれなければならない。つまり主イエスと十字架上で合体することによって信仰者自身のからだを献げることができるといふわけである。生きた、聖なる供え物 主イエスの復活に合体されることによって生きた供え物となることができる。生きたままの供え物であり、生活そのものが供え物である。また、信仰者のからだは主イエスの血によつてき

よめられ、神のために聖別されたから「聖なる」ものである。神に喜ばれる 「神に受け入れられる、神の心になう」とも訳せる。主イエスが「神へのかんばしいかおりのささげ物」となられたように(エペソ5・2)。ささげなさい アオリスト時制であるから、「きつぱりと、一度限り」ささげることである。そして、ささげるべきものは「からだ」である。私の思いも、目も耳も口も、手も足も、主よあなたのものですと差し出すことである。礼拝の最終目標は、神の臨在に触れ、献身することにある(狭い意味の直接献身ではなく)。あなたがたのなすべき霊的な礼拝 「霊的な」と訳されたギリシャ語のロゴスには、およそ二つの意味がある。一つは口語訳どおり「霊的」という意味で、ユダヤ教で各種のいけにえを用いた物質的な礼拝とは違うということを強調することになる。「混じりけのない霊の乳」(1ペテロ2・2)も同じ用例。もう一つは、「当然の、合理的な、理にかなった」という意味を持つ(ロゴスは英語のロジックの語源)。献身は、主に贖_{あがな}われた者として当然の、また理にかなった礼拝行為である。十戒の前文と本文の関係にも通じる。口語訳はこの両方の意味を訳出している。この霊的な礼拝とは、狭い意味の主日礼拝だけではなく、広い意味の神を礼拝する生活をいう。日々の生活を神にささげることである。からだをささげていけば、平日の生活も広い意味の礼拝になるわけである。

2 この世と妥協してはならない 1節はクリスチャンのなすべき献身についてであるが、2節はこの世における生活態度についてである。「妥協する」(スケーマタイゾー)は、外側の形に同化すること、いわばこの世という鋳型にはまることである。株価のグラフのように変りやすいこの世と妥協したり、調子を合わせるならば、クリスチャンのスタンスも揺れ動いて行動や言動にも一貫性を失つてしまう。だから変遷やまないこの世と一線を引き、状況倫理ではなく、聖書に基づく絶対基準に立ち続けることが命じられている。心を新たにすることによって この心(ヌース)は「判断力」「わきまえ知る力」を意味する。人生観、物の見方、善悪を見分ける力を全く新しくすることである。その新しさは私たちに属するものではなく、内にいますキリストの新しさである。その新たにされた識別力も、自分の努力ではなく、からだを供え物としてささげることによって与えられる聖霊の力である。造りかえられ(メタモルフォオー) 「変ぼうする、変容する」さなぎが蝶(ちょう)のように変身するように、質的に造りかえられることである。この世に流されず、キリストの筋金を入れられ、堅く立つて揺るぎない人に変えられる。何が神の御旨であるか 神の御旨(ご意志)には、3つの形容詞が係_{かか}っている。「善なる、神に喜ばれる、全き」である。わきまえ知るべきである(ドキマゼイン) これは元来、金属を火によつて試すことに用いられた。神の御心が何であるかを識別することができるためには、聖霊によつて心を新たにされることが前提になる。

参考図書 『新聖書注解』、『バークレー聖書注解』、『福音の輝き』(小林和夫)、『ロマ書の研究』(内村鑑三)、『ロマ書注解』(バーネット) など。

4日 礼拝メッセージ例

聖書 ローマ12・1～2

タイトル 喜びの礼拝

暗唱聖句 あなたがたのからだを、神に喜

ばれる生きた、聖なる供え物としてささげなさい。

目 標 心もからだもすべてを献^{ささ}げて喜びの礼拝をしよう。

ローマ12・1

導入

(光田)

希望に生きるという期題の中で、教会生活について学びましょう。私たちは毎日、いろいろなルールを守って生活しています。例えば、歩く人は右側、車は左側、赤信号は止まる、などの交通ルールです。このルールを守らない人がいるならば、事故が起きます。同じように、信仰生活のルールを知って守ることが大切です。今日はその第一番目、礼拝をささげることについて学びましょう。

日曜礼拝

旧約聖書の時代には、毎日たくさんの牛や羊などの動物が、人の罪の身代わりとして殺されていました。そうしなければ、神様に近づく方法がなかったからです。しかし、イエス様が私たちの罪の身代わりに十字架にかかって死なれ、三日目によみがえられたので、今はもう動物のいのちをささげる必要はなくなりました。私たちは罪が赦^{ゆる}され永遠のいのちをくださった神様に感謝して、日

曜日の礼拝を献^{ささ}げることができま。週の初めの何もかもが真新しいときに、私たち自身を神様に献^{ささ}げできる喜びの日です。

からだをささげる礼拝

からだをささげることについて考えてみましょう。日曜日の最高の時間を神様におささげします。皆さんは毎週日曜日の朝をどのような気持ちで迎えているでしょうか。土曜日から準備して、待ち遠しくてウキウキしていますか。それとも、日曜の朝はもつとゆっくり寝ていたいなあと、しぶしぶ起きているのかな。

日曜の朝、見たいテレビ番組があるとか、友だちと遊びたい、どちらを選ぶうかと迷ったことはありませんか。悪魔はいろいろな方法で私たちを誘惑してきます。だから、土曜日は早く寝る。テレビはビデオのセットをする。友だちとは、日曜日の午後遊ぶ約束をするなど、神様にお祈りして解決方法をいただきましょう。

たとえ、からだは教会に行っていたとしても、ゲームの事が気になって気が散っていたり、お友だちと話をし、み言葉を聞いていなければ、神様に喜ばれる礼拝とは言えませんね。神様は特別にあなたにお話をしようとしておられます。だから、私たちもしっかり心の耳を開いて、神様のみ言葉を聞きましょう。

心をささげる礼拝

全世界の王様である神様の前に出るのに、汚れたままの服を着ていくのは失礼ですね。洗濯をした気持ちのよい服装で出かけましょう。服装のこただけではありません。汚い心のままで行けば神様は悲しまれます。昨日、友だちと喧嘩^{けんか}別れをし

たままではないですか。だれかに「ごめんなさい」と謝らなくてはいいけないことを残してはいないでしょうか。心もからだも神様の前に出るのにふさわしく整えましょう。日曜日の礼拝に行くためには、土曜日にちゃんと心と体の準備をしておかなければなりませんね。

私たちは礼拝に出席してみ言葉をいただきます。悲しんでいる人には、慰めや励ましを与えられます。また、罪が示されたなら悔い改めて、きよめていただくことができます。イエス様の十字架の愛によって心を新しくされ、私たちはいつも神様に喜ばれるように変わっていくことができます。心とからだと生活のすべてを、神様に喜ばれるようにお使いくださいとおささげしましょう。

まとめ

礼拝は、心から神様に感謝と賛美をおささげるすばらしい日です。ルールを守るなら、自分が守られるように、日曜日の礼拝を喜んでささげるなら、私たち自身も神様に守られます。

教会での礼拝の時間は一週間の内のたった1時間だけです。では、他の6日間をどのように過ごしたらよいでしょう。後は全部自分の時間で、神様とは関係ないと思っている人がいるでしょうか。神様は毎日私たちを導いてくださいます。週の初めに礼拝をささげるように、毎朝、神様を賛美し、今週いただいたみ言葉を思い出しながら過ごしましょう。イエス様だったからこそなときどうするかなど、いつでも考えて、神様に喜ばれる生活に励みましょう。

♪すべてはイエス様のもの♪

(福音子どもさんびか68)



聖書 ローマ12・3～21 テーマ 愛の交わり

序論

(鎌野)

パウロは、対神的・垂直的・個人的な礼拝の重要性を述べた直後に、教会の対人的・水平的・共同体的な意義について記し始める。神との関係が整えられるなら、当然、人との関係、人との交わりも健全なものになるはずだからである。今週の聖書箇所には、「何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるか」が、人の交わりの3つのケースにおいて、具体的に説かれている。

一、キリストのからだとしての交わり

パウロは、1コリント12章やエペソ4章などで、「教会はキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体」という重要な原理を述べている。この箇所ではその原理を、二つのからだにたくさん

の肢体があるが、それらの肢体がみな同じ働きをしてはいない」と表現する。教会には様々な違った働きをする人々がいるが、それらの人々みなが必要なのだ。それゆえ、だれも「思いあがることなく、…慎み深く思うべきである」。教会生活においては、この謙遜さが非常に大切であることを銘記しよう。大使徒であるパウロ自身も、決して傲慢にならず、「自分に与えられた恵みによって、以上のことを勧めている。

みな違った働きだが、どれも大切なものだ。自分に与えられた賜物をもって謙遜に人々に仕えると同時に、他の人々に与えられた賜物を尊重するとき、教会の交わりは健全なものとなる。原語では、恵みはカリス、賜物はカリスマタであり、同じ語源をもつことにも留意したい。

二、教会内の人々との交わり

9～13節には、教会内の人々との交わりの姿が描かれている。(愛(アガペー)には偽りがあつてはならない)からこそ、時には厳しく、(悪は憎しみを退け)ねばならない。しかし神を父とする家族なのだから、(兄弟の愛(フィラデルフィア)をもつて互にいつくし)むことも大切である。また、前段で学んだように謙遜に生きるなら、当然(互に尊敬し合)うこともできる。しかし、これらの行動は、主に對する真摯な態度があつてこそ可能であることを忘れてはならない。それゆえパウロは、(熱心で、うむことなく、靈に燃え、主に仕え、望みをいだいて喜び、患難に耐え、常に祈りなさい)と勧める。最後の、(貧しい聖徒を助け、努めて旅人をもてなさない)との言葉の背後には、彼が3回の伝道旅行中に経験した麗しい思い出があつたに違いない。

私たちの教会においても、このような愛の交わりがあるだろうか。もしも無いようなら、悔い改めて、今日からやり直そう。「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者は、偽り者である」(1ヨハネ4・20)。教会員が愛し合つて共にささげる礼拝こそ、主が喜ばれるものだ。

三、迫害する人々との交わり

パウロは、14節以下で、これまでと正反対の人々に対する態度を教える。(あなたがたを迫害する者を祝福しなさい)と命じるとき、パウロの心中には、「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」(マタイ5・44)との主イエスの言葉があつたろう。さらに迫害を受けている人々を思つて、「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」と言い、また迫害に屈しないために(互に思うことをひとつに)するよう勧める。それのみならず、(悪をもつて悪に報いず、すべての人に対して善を図りなさい。…すべての人と平和に過ごしなさい)と、崇高な倫理基準を示すのだ。それは、旧約聖書の中で、主ご自身が、(復讐はわたしのすることである)と言われ、また、(あなたの敵が飢えるなら、彼に食わせ)るよう命じられているからにはかならない。パウロの結論は、(善をもつて悪に勝ちなさい)であつた。

現在でも、あるいは近所・会社・学校で、「迫害」らしきものを受けるかもしれない。しかし、当時のように命にかかわるものではないだろう。パウロの命じるように、善をもつて悪に勝つ生き方をしようではないか。それは決して簡単なことではないが、疑いもなく、「善であつて、神に喜ばれ、かつ全きこと」である。

結論

教会生活の中で、私たちは神を愛し、人を愛することを学んでいく。その愛の交わりが教会の外にまで広がっていくことは、主の御旨である。

研究資料

(石田)

テキスト

5 キリストにあって一つのからだであり、また各自は互に肢体 今週のテキストには「互に」「共に」という言葉が6回も使われているところに注意を向けたい。三位一体の神が、互いに仕え合っているように、クリスチャンのお互いもそのように召されている。律法の第一は神との関係であるが、第二は人との関係であるから（マルコ12・30、31）。

6 それぞれ異なった賜物を持っている 御霊の賜物は、限られたクリスチャンだけに与えられているのではなく、すべてのクリスチャンに与えられている（1コリント12・7、11）。また一人のクリスチャンが、御霊の賜物のすべてを持っているわけではなく、神はどのクリスチャンにも、その個性に最もふさわしい賜物を与えておられる。これは「与えられた恵みによって」であるから、誰も誇ることはできず、うらやんだりすることは的外れである。

預言 神の言葉を明瞭に力強く語る聖霊による能力のことである。聖書では、予言することよりも、宣教するという意味で使われるほうがはるかに多い。預言は、神から感動を受けた言葉を神に代わって語ることであり、現代という状況の中で、人々に神の言葉を伝達することである。

7 奉仕（ディアコニア） これはクリスチャンの奉仕一般を指しているが、より具体的には「補助者」と「管理者」の賜物を含んでいると考えら

れる（1コリント12・28）。補助者の賜物は、他の人たちが何が必要としているかがわかり、その機会を生かして喜んで仕えてゆこうとする。また物質的な困窮に応えてゆけるようにいつも心備えをしている。管理者の賜物は、教会員が支障なく自分の職責を果たせるように、組織作りをする。**教える** 人々に適切に福音の真理を語り、それを生活に適用させることである。真理がその人の生活に生かされるようにして導くことである。

8 勧め この賜物の働きは、人を引き上げ、励まし、力づけ、キリストにある最善の自分となるように、諭すことである。霊的に成長できる方法を切り開いていけるように助けるのである。他のクリスチャンをさらに優れた円熟へと導くために、何が効果的で実行可能なステップかということを見つけるための努力をしている。**寄付** この賜物は、神のわざのために物質的なものをもつて、他者の生活と奉仕を助ける天来の能力のこと。**指導**（いわゆるリーダーシップ） 教会に与えられた神からの目標に向かって、自発的に働くように整える能力である。操作や圧力や強制によるのではなく、信頼関係の中で導く聖霊による力である。**慈善** この賜物は、他者の味わっている喜びとか幸福、痛みとか失望などの感情を、敏感に感じ取れるように整える。この賜物を持っている人たちは、人を支える奉仕に当たり、他者の霊的な動揺を取り去り、慰めを与える。

9 愛には偽りがあってはならない。悪は憎み退け 愛には悪を憎む反面もある。悪を憎むことがなければ、その愛には偽りがある。

10 兄弟の愛（フィラデルフィア） 肉親間特有の愛情を表す言葉であるが、これをクリスチャンお互いの間で持つように勧められている。聖霊による愛は意志によって開始されるが、進むに従って感情も伴うものである。この愛が実行されるところに、世の人々は魅力を感じる。**進んで互に尊敬し合いなさい** 神に愛され、異なった賜物を与えられているお互いとして見るときに尊敬し合うことができる。

13 貧しい聖徒を助け、努めて旅人をもてなしなさい 聖徒は交わりのあるクリスチャンであるが、旅人は見ず知らずの人や外国人を含む。個人主義の傾向に挑戦する言葉である。

14 迫害する者を祝福しなさい 生まれながらの人間にはますます手に負えない領域である。17節以下に詳述されている。

15 喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい 神はほかの人が喜んでいることを喜ばれる。神の喜ばれることを喜ぶのは神の子として可能である。またお互いは「キリストにあって一つのからだ」（5）に属しているので、人の痛みも喜びも、同じように感じる事ができるはずである。神ご自身、信仰者の幸福を喜ばれ（詩篇35・27）、その悩みを共に悩まれる（イザヤ63・9）。

16 互に思うことをひとつにし ほかの人と全く同じ考えや感じ方をする事はできないが、一致への努力は共通の義務である。

参考図書『バークレー聖書注解』、『ロマ書の研究』（内村鑑三）、『ロマ書注解』（バーネット）、『御霊の賜物』（キングホーン）、など。

聖書 ローマ12・3～21
 タイトル 愛の交わり
 暗唱聖句 喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。 ローマ12・15
 目標 神様の愛に満たされて互いに慰め合おう。

導入

(光田)

教会生活のルールから、先週は神様をまず礼拝して一週間を始めることを学びました。今日は、お互いを大切にし、愛し合いましよう、という毎日の生活のルールです。今日の聖書のみ言葉を実行するのは難しそうかな。でも大丈夫。このできそうにないことをできるように変えてくださるのが、イエス様です。

一つのからだ

皆さんは、どんなことをするのが得意でしょうか。たとえば、サッカー、パソコン、習字、将棋ですか。また、あなたにはどんな良いところがありますか。ご飯を残さずに全部食べる。机の上がいつもきれい。早寝早起きをしている。あなたのお友だちの良いところは何でしょう。私たちはみんなそれぞれに素晴らしいところ（神様からの賜物）を持っています。だから、良いところを出し合って生活すると、とても楽しいです。私たちのからだには、目や鼻や口や手や足があつて、自分のためにも必要なのですが、私たちの周りにいる人たちを助けたり、励ましたりするために使うようにできています。

消しゴムを忘れてきた人に貸してあげたり、お

友だちが怪我をしたときには、大人の人を呼んできて一緒に助けたりできるなら、神様は喜んでくださいます。学校でも、お家でも、だれかのお役に立つのは素晴らしいことです。私たちは一つのからだとして、お互いが神様に造られています。

思いを一つに

お互いが一つとなるためには、一人一人がだれも自分のことを偉いと思ったり、何かできるぞと自慢する心があつてはうまくいかないはず。だれかがほめられたとき、それくらいなら自分にもできるとか、ねたんたりすることはありませんか。これも神様が喜ばれる心ではありませんね。いじめをする人たちがいます。もし、だれかがいじめられて、はみ出されていた人がいたなら、あなたはどうしますか。仲間はずれにされている人の側に付くことができるでしょうか。自分に意地悪をする人に、仕返しをしたり悪口を言い返したりはしませんか。聖書は、喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさいと教えています。また、意地悪をされても仕返しをしたりせず、神様に任せなさいとも言っています。私たちの心に本当の愛がなければ、一つにはなれません。

イエス様の手本

イエス様は、罪人と呼ばれて人々からのけ者にされていた人々の友となられました。彼らと一緒に食事をし、汚れた病人に触れて病を癒されました。十字架におかかになる前の夜、裏切ることが分かつていたイスカリオテのユダの足を、心を込めて丁寧に洗われ、ユダが悔い改めるように願われました。イエス様の心は、私たちの心とは何と違っているのでしょうか。相手が自分に対してど

のような態度をとる人なのか、善人にも悪人にも同じように愛を注いでくださる神様です。

その上イエス様は、私たちが自分で受けなければならぬ罪の刑罰を、身代わりに受けて死んでくださいました。それは、私たちに何かよいところがあったからでしょうか。いいえ、その反対に、私たちが悪いのに、代わって罪を負ってくださいたのです。

例話

ある日、幼稚園でかけっこがありました。一人の男の子は、幼稚園が終わってから急いで家に帰りました。そして、家に帰るなり、お母さんに今日のかけっこの報告を始めました「ねえねえ、お母さんすごいよ！隣の〇〇君はね、かけっこで一等になったんだよ。どんどん追い抜いて、すごく早くてかっこよかったんだよ！」と、まるで自分が一番にでもなったかのように興奮ぎみです。でも実は、彼は競走で最後にゴールしてきていたのです。

後でこの話をお母さんから聞いたお父さんはお友だちの喜びを自分のことのように喜んで、自分の息子の心を、本当にうれしく思ったそうです。

まとめ

喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣く心が与えられるように、神様に求めましょう。イエス様は、私たちに完全な愛のお手本を見せてくださいました。だから、私たちの努力ではできませんが、罪を悔い改めて神様に従うなら、神様が造り変えてくださるのです。

♪愛をください♪

(友よ歌おう74)



聖書 IIコリント9・6～15 テーマ 献金の恵み

序論

(鎌野直人)

クリスチャンの歩みのなかで、最も誤解されやすいのは献金である。「あなたの収入の十分の一をささげなさい」と言われた時、それを重荷と感じる人は多い。しかし、「献金は恵み」である。なぜか、考えてみよう。

一、献金の原則

パウロは、エルサレム教会のためにささげる献金をあちこちの教会にその手紙の中で依頼している。本書の8～9章においても、コリント教会の人々にこの献金を勧めている。彼らはこの献金を重荷と感じていた。そこで、パウロは献金の原則をまず語り、彼らの理解を正し、健全な献金をささげることができるように促した。

パウロは献金を「贈り物」と呼んでいる(5節)。そして、豊かな贈り物をするようにコリントの教会に勧めた。それは「豊かにまく者は、豊かに刈り取る」(6節)という農業の原則が献金にも当てはまるからである。豊かにささげるならば、豊かに与えられる。更に、「神は喜んで施す人を愛して下さる」(7節)という原則も献金にあてはまる。しぶしぶのささげものを神は喜ばれない。むしろ、気前よくささげる時、神は祝福をもつてささげる者に報いてくださる。

二、期待すべき刈り取り

6～7節において述べられた原則に従ってささげる者に与えられる神の祝福とはどのようなものであろうか。「恵みを豊かに与え、満ち足らせ、富ませる力のある」(8節)方から何を期待することができのだろうか。

まず、神は「常にすべてのことに満ち足らせ」(8節)てくださる。たくさんささげれば、自分の手元に残るものは少なくなると考える。しかし、神へのささげものについて言うならば、その考えは間違っている。喜んでささげる者に対して、神は「種を備え、それをふやし、そして、義の実を増して下さる」(10節)。喜んでささげる時、必要なものは神によっていつも備えられ、ささげた者は満ちあふれた歩みをするができる。神を計算に入れて、喜んでささげる時、必要がいつも満たされている生涯を送ることができる。

次に、気前よくささげる時、私たちは不平に溢れるのではなく、「神に感謝するに至る」(11節)。強制され、無理してささげた時、ちよつとしたことで不平がささげた者の内に沸き上がる。このような歩みは健全ではない。ところが、神を計算に入れて、喜んでささげる時、その人自身のあらゆる必要が満たされるばかりか、更に惜しみなく施すことができるようになり、ついには神への感謝に至る。「このような者さえも神は用いて、聖徒たちの欠乏を補ってくださる」と気がつく時、不平などは生まれてこない。

最後に、私たちは「神に栄光を帰す」(13節)者とされる。豊かにささげることができたのは、決して私たちに何か特別な力があるからではない。それは「キリストの福音の告白に対して従順」で

あったからである(13節)。豊かにささげることができたからといって、自らを誇ってはならない。なぜならば、ささげることができたのは、神が「種を備え」(10節)てくださったからである。私たちのささげものの源泉が神であることに気づいた時、私たちは「自らを誇る」という罪から守られ、むしろ喜びに満ちた、謙遜な者へと変えられていく。

三、神の賜物

このように、「豊かにまく者は、豊かに刈り取る」(6節)という原則は、ささげものにおいて真実である。ささげることによって、ささげる者はあらゆることにおいても満たされ、隣人の欠乏は補われ、神への感謝は私たちのうちに溢れ、神に栄光が帰せられる。すべてが「良循環」していくのである。

この「良循環」の背後には神からの「言いつくせない賜物」(15節)があることを忘れてはいけない。イエス・キリストを私たちのために賜った神は、あらゆる良きものを恵みとして与えてくださる方である(ローマ8・32参照)。「献金が恵みである」とは、ささげることも神の恵みから始まることを意味する。

結論

キリスト者生涯の原則は「恵みによる」である。そして、言いつくせない神の恵みという賜物が実感できない限り、私たちのささげ物は貧困なものであり続ける。自らの歩みを点検させていただきたい。

研究資料

(石田)

テキスト

6 少ししかかかない者は、少ししか刈り取らず
このまぐことと刈り取ることは、コリントのクリスチャンが、困窮の中にあるユダヤのクリスチャンに援助をすることと、それに対する神の報酬に当てはめられている。このことは、献金とその祝福の關係に適用できる。「少し」とか「豊かに」という言葉は、量の問題よりも「惜しむ心」であるかないかに關係している。聖書は、相手からではなく、神からの靈的物質的な報酬を期待することを禁じていない。それどころか良いわざをする動機として随所で勧めている。

7 しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきである
パウロはコリントのクリスチャンに圧力をかけてまで援助をするように促してはいない。むしろ彼らの自主性を重んじ、自発的に援助をするように勧めている。**喜んで施す人を愛して下さる** 神の恵みに応えて嬉々として援助しようという意志が称揚されている。

8 神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、すべての良いわざに富ませる力のあるかた
富んでいるとするならばそれは神の恵みであるから、それに応えて良いわざに励む管理責任が生じる。しかし責任だけでなく、力も与えてくださる。

9 彼は貧しい人たちに散らして与えた 詩篇III・9の引用。この詩篇は、主の恵みに応えて施す人がいかに祝福されるかを歌っている。これは「施し散らして、なお富を増す人があり」(箴言II・

24)に通じる。その義は永遠に続く「義」とは愛を動機としてなされた良いわざのことで、その天における報酬は、永遠であること。

10 種まく人に種と食べるためのパンとを備えて下さるかた イザヤ55・10の七十人訳からの引用。**あなたがたにも種を備え、それをふやし** 神はコリントのクリスチャンの経済を豊かにしてくださり、それによつて困窮の中にあるクリスチャンを援助できるように整えてくださる。一から十まで神様持ちであること。**あなたがたの義の実を増して下さる** コリントの異邦人クリスチャンがエルサレムのユダヤ人クリスチャンに援助をするとき、神はキリストのからだなる教会の愛と一致という義の実(靈的收穫)を増してくださる。ユダヤ人にしてみれば、異邦人から愛の贈り物を受けるという神の恵みを実感することになる。これは、選民意識と排他主義を引きずっていたユダヤ人には、衝撃的であつただろう。

11 すべてのことに豊かになって、惜しみなく施し クリスチャンが豊かであるとするならば、それは惜しみなく施すためでもある。

12 この援助の働き(レイトルギア) この語の一般的用例としては、国家に対する市民としての奉仕義務、奴隷の主人に対する勤めを言う。「援助」はこの文脈に適用した意識であり、直訳的には「奉仕、仕えるわざ、ミニストリー」である。神は、聖霊によつて人に対して仕えたわざを、ご自身への奉仕と見てくださる。だからこの援助は単なる義援金ではなく、神への献金である。この援助の働きは、神に対する多くの感謝によつてますます

豊かになる 援助(奉仕)した者自身が祝福されるので、神に感謝するようになり、その感謝の思いからさらに援助を続けるようになる。神への感謝は、奉仕(ミニストリー)の動力の一つである。こうして恵みによる良い循環が続き得る。

13 キリストの福音の告白に対して従順であることがわかつてきて、**彼らは神に栄光を帰し** コリントのクリスチャンが神に従順になつて援助をするようになったことが、ユダヤのクリスチャンにわかるようになるということ。彼らの良いわざが、それを受けた人々の心を神に向けさせる。

14 あなたがたに賜わったきわめて豊かな神の恵みのゆえに、あなたがたを慕い ユダヤ人のクリスチャンが、コリントのクリスチャンの内に働く神の恵みを見て、彼らを慕い、彼らのために祈るようになるはずである。こうしてキリストのからだの交わりの麗しい実質が現れることが期待されている。「行いと真実とをもって愛し合おうではないか」(Iヨハネ3・18)とあるように。

15 言いつくせない賜物 これはご自分の命を犠牲にしてくださいと主イエスのことを指している(8・9)。この方は、言葉に表せない、言葉を失うほどの驚くべき神からの贈り物である(ヨハネ3・16)。この偉大な賜物をいただいていること、それによつて永遠の命という莫大な富をいただいていることを、コリントのクリスチャンに思い起こさせ、援助(奉仕)に対するさらなる動機にさせようとしている。

参考図書 『パークレー聖書注解』、『新聖書注解』、『ティンダル聖書注解』など。

聖書 IIコリント9・6～15

タイトル 献金の喜び

暗唱聖句 各自は惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきである。 IIコリント9・7

目 標 神様からいただいているものの中から惜しみなくささげよう。

導入 (光田)

皆さんは毎月決まったお小遣いをもらっていますか。何を買うのかな。おやつ、それともゲームかな。

今日は献金のお話です。礼拝の中で献金をおささげしますが、今日のお話を聞いて、喜んで献金をおささげしましょう。

コリントの教会

コリントの教会はエルサレムの教会が困っている時に、献金を集めて援助し始めたのですが、助けの必要な人たちのことを考える、心のゆとりがだんだんなくなり始めていました。そこで、パウロは献金を預かりに出かける前に、この手紙をコリントの教会に宛てて書いています。

パウロは、献金をするときの心がすぐ分かるように、みんながよく知っている種まきの譬(たとえ)を用いました。種を少ししかまかなければ、たくさん収穫は期待できません。しかし、たくさん種まきをするならば、それだけ多くの収穫が期待できます。

それと同じように、人に施し(困っている人を援助する働き)をする場合にも、人にあげるのはいやだなあと物惜しみする心で、しぶしぶ、けちけちながら、少しだけ献金をするのは、神様に喜ばれないということを教えています。ささげる金額は、まず自分で神様にお祈りして、そこで決めたとおり、喜んで精一杯ささげれば、神様も喜んでくださるのです。まく種を与えてくださるのが神様であるように、神様は人に施しをする人にも、必要なものは十分備えてくださるのです。

もしも、これが反対の立場で、私の方が困っているとき、心からの援助をしてくれる人があったらどんなにうれしく、感謝したくなるでしょうか。神様に喜んでいただける心を持ちたいですね。

コリントの教会の人々が、心を込めて援助の献金に励むなら、コリントの教会に最初に宣教者を送り出したエルサレムの教会は、どんなにうれしいことでしょう。福音を聞いたことが、聞いただけで終わらず、愛の働きをするように成長していることになるからです。こうしてお互いの教会が足りないところを補い合い、助け合えば神様が喜んでくださいます。

礼拝献金

さて、これから私たちは礼拝献金をささげます。自分で決めて喜んで感謝してささげましょう。7月には献金を偽ってささげたアナニヤとサツピラの話(使徒5章)がありました。他人によく見られたくて、神様と人にうそをついたので、あつという間に死んでしまいましたね。神様は私たちの動機をご覧になられます。

献金はささげる額も大事ですが、ささげる心が

もつと大切です。ルカの福音書21章には、お金持ちが得意そうにたつぷりささげたお金より、貧しい女の人がささげた2レプタの金額の方が多いとイエス様がおっしゃった記事があります。神様は人の目には見えないところをご覧になれるのです。

例話

アメリカの鉄鋼王と呼ばれたカーネギーは、貧しい生まれでしたが、努力して大変なお金持ちになりました。カーネギーがお金持ちになつてからも言い続け、実行し続けたことがあります。それは、たくさんのお金を、自分のことや家族のためにだけに使うことはよくない。それよりも、文化的で人に役立つ働きにささげるべきだ、ということでした。彼がささげたお金で建った図書館は、アメリカとイギリスだけでも千七百ヶ所以上もあるそうです。その他、多くの文化事業にもたくさんのお金をしたそうです。

まとめ

今日のみ言葉は、だれかが言うから献金をする、というのではなく、神様の前にお祈りしたことを、感謝を持って実行することが大切だと教えています。私たちの真心からの献金を神様は何倍にも増やして用いてくださいます。そして私たちの心も喜びでいっぱいになります。

教会で神様にささげる献金とは別に、最近では地震や津波、戦争や貧困など、世界中の多くの人々が援助を求めています。そして、募金活動や援助活動が盛んです。私たちも小さな働きでも、お祈りをして、できることから始めましょう。

♪三つの約束♪ (友よ歌おう21)



聖書 使イコリント9・15～23 テーマ 伝道しよう

序論

(鎌野直人)

伝道はクリスチャンが当然なすべきことである。しかし、単なる命令として伝道をとらえるべきではない。パウロの福音宣教に対する姿勢から、私たちのあるべき姿を学びたい。

一、権利を用いない

1節～14節において、パウロは、自らが使徒であること、コリントの教会の人々はパウロの伝道の実であること、そして「福音を宣べ伝えている者たちが福音によって生活すべきこと」(14節)を述べている。これらの議論の後、彼がコリントの教会からサポートを懇願することが予測されよう。しかし、彼は「わたしは、これらの権利を一つも利用しなかった」(15節)と述べている。自らサポートを受ける権利を持っているにも関わらず、彼はそれを要求しなかった。ただ自分の手で働いたものによって、福音を宣べ伝えていたのである。

二、伝道は神からの使命

このパウロの姿を理解するためには、伝道についての二つの原則を知らなければならぬ。

まず、「福音を宣べ伝えることは神からの使命」である。パウロはどれだけ伝道をしたとしても、それは自らにとって何の誇りにもならない(16節)。伝道をする必要がないのに、パウロが自らすすんで伝道しているならば、福音宣教はパウロにとって誇りになったであろう(17節)。しかし、パウロ

には選択の余地はなかった。「わたしは、そうせずにはおれないからである」(16節)とある通りである。では、なぜパウロには選択の余地がなかったのだろうか。福音を宣べ伝えることがパウロにゆだねられた務(17節)であったからである。天地を造られた神が、そしてよみがえらされたキリストがパウロに福音を宣べ伝えることを委ねた。彼は神から福音宣教の使命を与えられた。使命に従って行動しているのだから、パウロは何も誇ることができない。

パウロにとってそうであるように、私たちにとっても伝道は神からの使命である。「してもしなくてもいいこと」ではなく「当然すべきこと」である。

三、隣人と同じ目線に立つて

伝道についての二つ目の原則は「伝道は隣人と同じ目線に立つて行うこと」である。

パウロはコリントの教会からサポートを受けるという自分の権利を用いなかった。それこそが彼自身の誇りである、と言っている(15節)。「無代価で提供し…宣教師として持つ権利を利用しない」(18節)という自分にとって不利な選択をあえてすることによって、彼は誇りをもって宣教に当たることができたのである。

しかし、パウロは単に自らの誇りのために教会からのサポートを辞退したのではない。経済的サポートによって宣教の働きの自由が奪われることを危惧して、彼はそれを受けなかったのである。なぜなら、経済的にサポートしてくれている教会に隷属する存在として伝道をしたくなかったのだ。

むしろ、サポートを断ることによって、彼は「すべての人に対して自由」(19節)となる道を選ぶことができるようになった。

パウロは自由であつたからこそ、ユダヤ人にはユダヤ人のように、律法の下にある者には律法の下にある者のように、律法のない異邦人には異邦人のようになることができた(20～21節)。福音を宣教するために、伝えるべき人々と同じ目線に立つて、キリストを伝えることができたのである。

さらにパウロは「弱い人には弱い者になった」(22節)と言っている。これは8章に出てくる良心が弱いゆえに偶像にそなえられた肉を食べることができない人たちを指している。彼らに福音を伝えるために、パウロは「断じて肉を食べることはしない」(8・13)とまで言っている。福音宣教の妨げとなる、あらゆるものを排除しようとしたパウロの姿をここに見ることが出来る。経済的サポートを受けなかったからこそ、自由であつたからこそ、パウロはここまで大胆に伝道をする事ができたのだ。

私たちはどのような姿勢で伝道をしているだろうか。隣人と同じ目線に立つて、妨げを最大限取り払って、伝道しているだろうか。この姿勢を忘れる時、福音宣教は困難となる。

結論

「福音のために、わたしはどんな事でもする」(23節)とある。神から与えられた使命を全うするため、そして、できる限り妨げを取り除いて福音を宣べ伝えるために全力を注がせていただきたい。

研究資料

(石田)

テキスト

16 もし福音を宣べ伝えないなら、わたしはわざわいである。何か罰が下るといふよりも、自分の心に責めを感じることであろう。

17 進んでそれをすれば、報酬を受けるであろう。福音宣教は報酬を受けるに値するが、たとえそれがなくても神からの霊の報酬にもれることはない。わたしにゆだねられた務（オイコノモス）邸宅の執事、大農園の監督、大牧場の管理者などに用いられた言葉で、転じて「神の奥義を管理している者」（4・1）など、福音の管理者、キリストに仕える者を表す。

18 福音を宣べ伝えるのにそれを無代価で提供し福音宣教によって報酬を受け、それで生活することは律法に定められたことであると適用しているが（9・14）、パウロはあえて報酬を受けない道を選んだ。しかしこれは必ずしも一般化できることではなく、彼の立場における独自の選択であった。

19 わたしは、すべての人に対して自由であるがパウロは身分の上で自由人であり、親譲りのローマ市民権まで持っていた。これは属州ユダヤの支配を超えて皇帝にまで上訴できる身分である（使徒25・11）。さらに内面においても自由人であり、キリスト以外の誰にも支配されることはなかった。これは彼が身分の上で奴隷であったとしても同じことである。できるだけ多くの人を得るために、自ら進んですべての人の奴隷になった。その彼が

あえて自分の自由を放棄して、すべての人に仕える道を選んだ。得手不得手の問題ではなく、自我の明け渡しの問題である。何のために奴隷となるのか。主イエスのために人々を得ること、彼らを福音の支配の下に持つて行くこと、悪魔の束縛と勢力から解放すること、神の子としての輝かしい自由にまで連れて行くことのためである。

20 ユダヤ人には、ユダヤ人のようになったパウロ自身は血筋においても教育においても紛れもないユダヤ人として育ち、長じてからはユダヤ教のスーパーエリートであった。その彼が回心してから、ユダヤ教の律法規定から解放された。わたし自身は律法の下にはない。「律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義」に生きていること（ピリピ3・9）。律法の下にある人には：律法の下にある者のようになった。しかしユダヤ人を獲得するために、その慣例に自分を合わせた。ユダヤ人の良心のよさを尊重したからである。実際、テモテに割礼を施し（使徒16・1・3）、ユダヤ教の儀式に参加した（使徒21・23・26）。これは妥協でも迎合でもない。

21 律法のない人には：律法のない人のようになった。ユダヤ人以外のいわゆる異邦人に対しては、クリスチャンになるに当たって、ユダヤ人の律法規定を行わなくてもよいことを強調した。それは宣教者のパウロがユダヤ人であるから、彼の勧めに従って入信すれば、ユダヤ人の律法を守らなければならぬと人々が身構えたからであろう。たとえばユダヤ人の食物規定や割礼、安息日の規則などは異邦人に相当な違和感をいだかせたに違い

ない。今日でも、ノンクリスチャンに対してクリスチャンの宗教的習慣を福音の前に提示したら、その多くはたじろいでしまい、「律法のない人を得る」のに障害となるだろう。わたしは：キリストの律法の中にあるのだが、律法主義から解放されているが、だからといって律法を放棄するのではなく、キリストにある愛を動機として、自発的に、律法に従っているということ。

22 弱い人には弱い者になった。この弱い人とは、既にクリスチャンになつてはいるが、「良心の弱い人」（8・7・13）のことで、たとえば偶像への供え物は悪霊によって汚れているから食べないという人のことである。彼らは偶像の神々と言われるものは実際にはないものと割り切れない。弱い者になったというのは、そういう彼らの良心のよさを見下げず、むしろキリストの弟子として建て上げるように努める態度である。なんとかして幾人かを救うためである。救霊という大目的のためには、自分の小さなこだわりは捨てても惜しくないという心のあり方である。

23 福音のために、わたしはどんな事でもする。福音の前進のためなら、どんな犠牲もいとわない、そのことを最優先事項にするという宣言。わたしも共に福音にあずかるためである。福音を伝えた相手が生まれ変わり、成長するのを見ることは、宣教者にとってこたえられない喜びである。こうして福音の祝福にあずかることが宣教の動力となる。

参考図書『バークレー聖書注解』、『コリント人への手紙』（モルガン）、『ティンダル聖書注解』

聖書 Iコリント9・15〜23
 タイトル 伝道しよう
 暗唱聖句 福音のために、わたしはどんなことでもする。
 Iコリント9・23
 目 標 喜びに押し出されて伝道しよう。

導入

(光田)

教会生活のルールを学んできましたが、今週はその終わり、伝道です。イエス様がこの世においてくださり、十字架にかかって救いの道を開いてくださったことを伝える働きは、教会の大切な使命です。

救われたパウロ

救われたパウロのことは去年の8月に聞きましたね。彼はクリスチャンが大嫌いで、コチコチのユダヤ教徒でした。イエス様を信じている人々を迫害して廻り、捕まえては牢屋へと送り込んでいました。けれども復活のイエス様に出会って、全く造り変えられたために、超一流のクリスチャンに変身してしまった人です。

また9月には、コリントに行つてアクラとブリスキラ夫妻の家に住み、彼らと同じ天幕造りの仕事をしていたことを学びました。パウロは生活のために自分も働きながら伝道をしていました。自分だけが特別な伝道をしているから、自分は生活のためには働かない、自分だけは特別だ、という考えは持っていませんでした。

そればかりか、イエス様を信じるだけで救われ

るという尊い救いの道を知らないで、律法を守つて救われようとしているユダヤ人の何人かにも、どうかしてイエス様が本当のメシヤ(救い主)であることを伝えたい、という思いがパウロの心にいつぱいでした。

パウロの願い

誰かが死ぬような病氣にかかつていて、私がある病氣が絶対に治る方法を知っているとします。その上、その薬は0円、ただでもらえるのです。それを、死にかかつている多くの人たちにどうして知らせないでいられるでしょうか。パウロの心は、イエス様の福音を知らないでいる人々のために痛み、かわいそうで熱くなっていました。

パウロは、自分のことなど全く忘れてしまつて、この福音を伝えるために何でもしなければならぬと決心をしていたのです。その理由の一つには、パウロ自身が、以前はクリスチャンを迫害し、一番激しく攻撃していた張本人だったからです。だから、自分の失敗を他の人が繰り返さないで欲しいと思つていたのです。

私たちの周りにはいろいろ違った人がいます。野球の好きな人、水泳の好きな人、テレビゲームが好きな人もいれば、アニメが好きな人もいます。歩くのがゆつくりの人、速い人もいます。体の大きさ、話す言葉、習慣の違いなど、限りがありません。しかしパウロは、福音を伝えるためにはどんなことでもするし、だれにでも合わせることもできるのだと言っています。それは、自分のことよりも、滅びに向かつている人々が何とかして救われて欲しいからです。パウロの心は、十字架にかかれたイエス様の心と同じです。神様の愛はこのように自分のことを忘れさせてしまうほ

どでした。

例話

今から百年ほど前、イギリスにチャールズ・T・スタッッドという大学生がいました。当時アメリカから有名なD・L・ムーディーという人が伝道に来ました。彼の説教を聞いたチャールズは、罪を悔い改めてイエス様を信じました。そして後に、伝道のために自分をささげる決心をしたのです。

彼はインドや中国、最後はアフリカへ宣教に行きました。彼はお金持ちの家に育ち、何不自由のない生活をしていました。彼は結婚するときに、奥さんと祈つて相談し、持っていたたくさんのお金を、多くの伝道地にささげてからスタートしました。イエス様のために失うことが、大きな得だと心から考えたのです。そして、中国では髪型も服装も中国人のようにして過ごしました。アフリカではテントに住み、持ち物といえば、聖書とバンジョー(ギター的一种でマンドリンに似た弦楽器)と身の回りの荷物だけでした。彼の残した有名な言葉があります。「もし、キリストが本当に神であり、私の罪のために死んでくださったのなら、私にとっては犠牲を払うにすぎないことはありえない」。彼の伝道によって、イエス様を知らないでいた大勢の人が救われたのです。

まとめ

イエス様を救い主と信じる人は、どんな人でも救われます。イエス様のご再臨の時が迫っています。私たちも、何とかして何人かが救われるために、祈つて伝道しましょう。日本だけでなく外国に出かけていく人も起こされますように祈りましょう。

♪みんなで花園♪

(友よ歌おう10)



聖書 黙示録19・1～10 テーマ 小羊の婚姻

序論

(金井)

二〇〇六年度最後の月となった。今年度の年題は「教会とともに」であるが、今月はヨハネの黙示録から「教会の完成」について学びたい。

一、神によるさばき

ヨハネの黙示録は、ドミティアヌス帝の治世、紀元90年代に使徒ヨハネが流刑地パトモス島で見たイエス・キリストの黙示を記したものである。この書は直接的にはアジア州の7つの教会への手紙であるが、その内容は宇宙大の終末論である。6章から19章まで、《龍》||サタンとその配下にある諸勢力に対する神のさばきが記されている。

この世の終末には、《獣》||反キリストが、《龍》||サタンから権力を与えられて、全世界を支配する時代が来る(13・1～8、1ヨハネ2・18)。彼は皇帝ネロのように横暴であり、残虐である(13・18)。その時には《獣の像》を拝まない者はみな殺される(13・15)。《獣》の名が右手あるいは額に刻印されていない者はみな物を買うことも売ることもできないようにされる(13・16～17)。(ほかの獣)||偽預言者は《大いなるしるし》を行って人々を惑わし、人々に獣を礼拝させる(13・11～15)。続いて、《大いなる都バビロン》、《大淫婦》すなわちローマ帝国を予型とする強大な政治勢力が世界を支配する(17章)。地上の王たち、商人たち、あらゆる国民は、この《大淫婦》のとりことなっ

て《姦淫》^{かんいん}を行い、汚れたものとなる。

しかし、《十の角》すなわち十人の王たちと《獣》||反キリストは《この淫婦を憎み、みじめな者にし、裸にし、彼女の肉を食い、火で焼き尽くす》(17・16)。(大いなる都バビロン)は神のさばきによって瞬く間に滅びてしまう(18章)。

二、神へのさんび

19章の初めには、この神のさばきが実行されたことを受けて、天の大群衆が神をさんびする声が記されている。

《ハレルヤ、救と栄光と力とは、われらの神のものであり、

そのさばきは、真実で正しい。

神は、姦淫で地を汚した大淫婦をさばき、

神の僕たちの血の報復を

彼女になさったからである》

《ハレルヤ、彼女が焼かれる火の煙は、世々限りなく立ちのぼる》

《ハレルヤ》という語が使用されているのは、新約聖書ではここだけである。このヘブル語の意味は「ヤハ(主)を賛美せよ」である。

《大淫婦》は《聖徒の血とイエスの証人の血に酔いしれて》いた(17・6)。その流された《神の僕たちの血の報復》を神は実行されるのである。

神の勝利を喜び、二十四人の長老と四つの生き物とがひれ伏し、御座にいます神を拝して言った、「アメン、ハレルヤ」。(二十四人の長老)は天使の軍勢の幕僚たちである(4・4、イザヤ24・21～23)。(四つの生き物)は神の御座のそば近く

にいる高位の天使である(4・6～8)。

三、小羊の婚姻

この時、天では《大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のようなもの》が鳴り響いた。

《ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる。

わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。

小羊の婚姻の時がきて、

花嫁はその用意をしたからである。

彼女は、光り輝く、

汚れない麻布の衣を着ることを許された。

この麻布の衣は、

聖徒たちの正しい行いである》。

神の勝利によって、ついに《小羊の婚姻の時》が来た。《花婿》なるイエス・キリストは、自らを犠牲の《小羊》として、《花嫁》なる教会を贖(あがな)われたのである(エペソ5・25～27)。キリストはどれほど教会を愛しておられることか！教会はなんと尊い存在であろうか！

御使いはヨハネに言った、《書きしるせ。小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである》。この《小羊の婚姻》こそ、私たちのめざす目標である。

結論

悪魔の支配下にあるこの世では、キリスト者が迫害を受けるのは当然である。私たちは苦難の先に大いなる栄光と喜びがあることを覚えて、信仰を守り通したい。キリストの花嫁にふさわしく信仰の純潔を守り、キリストを愛して、仕えよう。

研究資料

(足立宏)

黙示録のメッセージを理解するためには、本書の構造を知る必要がある。その鍵の一つは、ヨハネに与えられた黙示には呼びかけが伴い、そこに新しい黙示の展開が見られること(1・9、4・1、8・2、11・19、15・5、17・1、19・11、21・9)。この視点に立つと、17・1と19・10は「バビロンの運命」と理解可能。その区分の中で本パラグラフは「神への賛美」(1・5節)、「小羊の婚宴」(6・10節)と位置づけられる。

テキスト

1・3 天の大群衆 ヨハネは神への賛美の大合唱を聞いている。しかしこれは贖^{あがな}われた聖徒たちによるもの(7・9以下)というよりも、おそらく御使いたちの大群衆によるものであろう。神の僕たち全てに対する賛美の招きは、5節以下に出てくる。そして6節で贖^{あがな}われた者たちと御使いたちとの調和した雷鳴的賛美が起ころと思われる。ハレルヤ 神をほめたたえるヘブル語表現のひとつで、主を賛美せよという意味。詩篇では繰り返して出てくるが、新約ではこの箇所のみ(19・1、3、4、6)。救と栄光と力 これらは世俗都市バビロンに属するものではなく、神だけのものである。そのさばき 神の救い以上に賞賛されるものではないが、実際この二つはともに属する。十字架に示された罪人への神の愛は、神の義を満たすことと分離できない。神ご自身は受肉した御子を罪人の身代わりとしてさばくことで、義を貫かれた(Ⅱコリント5・21)。その聖なる恵みをあくまで拒絶する者への究極のさばきは、

この世の肅正である。それ故、神への天の大合唱とさばきは、真実で正しい。神は、**姦淫で地を汚した大淫婦をさばき** 参照16・5と7。彼女の破滅は完全で再起不能。究極のさばきの前兆となったソドムとゴモラ(創世記19・28)とエドム(イザヤ34・10)への神のさばきのように。彼女が焼かれる火の煙は、**世々限りなく立ちのぼる**。彼女の運命は獣とその像を拝む者たちと同一(14・11)。

4・5 二十四人の長老 贖^{あがな}われた人たちの代表を指すと考えられる。四つの生き物 回復された全被造生物の代表と考えられる(参照4・4、6以下)。これらは全能なる神とその義に賛美をささげている。アメン これは神の救と栄光と力のゆえに御使いたちが神を崇拜することと一致する表現(参照3・14)。この語は堅固さ、真実を意味する。特にキリストが重要な内容を語られたとき、導入として使われている。神の約束が全てキリストにあつて肯定されている故、私たちも礼拝においてキリストにあつてアメンと唱え神に栄光を帰す(Ⅱコリント1・20、参照、黙示録1・6、7、18、5・14、7・12、22・20、21)。

6 ハレルヤ 御使いたち、贖^{あがな}われた全ての者たちが、神の国の完全な現れを見た時の賛美が歌われている。地を揺り動かすような驚くべきハレルヤ・コーラス。

7・8 小羊の婚姻 このイメージは主ご自身が持たれる真つ直ぐな愛に強調点がある。旧約において神はご自身をその民の夫として言及されてきた(イザヤ54・5、エゼキエル16・8以下、ホセア2・19以下、等)。そして新約において教会はキリストの

花嫁として描写されている(エペソ5・25、32、マタイ25・1以下、マルコ2・19、ヨハネ3・29、Ⅱコリント11・2)。ここで長く待望された瞬間が到来し、永遠に変わらない完全な結びつきが成就する。小羊と教会の婚宴によって永遠の神の国が完成する故**わたしたちは喜びしみ、神をあがめまつ**と。言う。本書において婚姻のイメージは繰り返されている(19・9、21・2、9、22・17)。

9 ここで宣言されていることは幸福の完成である。すなわち **小羊の婚宴** への参加。ここに主が最後の晩餐時に告げられた期待の実現を見るようである(マタイ26・29、参照ルカ22・28と30)。また主の約束の実現と言えよう(マタイ8・11)。そしてこのことは本書で「あらゆる部族、国語、民族、国民の中から」(例、5・9、7・9、14・6)と語られてきたことも一致する。これらは、神の真実の言葉である(参照21・5、22・6以下、Ⅰテモテ1・15、3・1、4・9、Ⅱテモテ2・11、テトス3・8)。

10 本書の記者ヨハネが御使いを拝もうとするが、御使いは自分も同じ僕であると言つて、それを止めさせる。被造物を拝む誘惑は新約で度々出てくる(参照マタイ4・8と10、コロサイ2・18、使徒10・25以下、14・11以下)。礼拝は神にのみささげられるべきもの。

参考図書 鈴木英昭「ヨハネの黙示録」『実用聖書注解』いのちのことば社、W・ヘンドリックセン「ヨハネ黙示録講解」(聖恵授産所出版部)、Hughes, P.E., The Book of the Revelation (Eerdmans)

聖書 黙示録19・1～10
 タイトル 小羊の婚宴
 暗唱聖句 わたしたちは喜び楽しみ、神を
 あがめまつろう。黙示録19・7
 目 標 キリストの花嫁としての装いを
 整えよう。

導入

(光田)

今日はイエス様の結婚式のお話です。エッ、イエス様が結婚する？そんな話は聞いたことがない、というお友だちもきつというでしょう。いつなの、と思っている人もいるかな。イエス様の花嫁さんは一体だれでしょう。そしてどんなにすばらしいことが起こるのでしょうか。

天の賛美

ヨハネはパトモス島で、将来起こる出来事について神様から特別にいろいろな幻を見せていただきました。その一つがイエス様の結婚式です。イエス様の結婚式が行われるための準備として、まず、神様の敵である悪魔が滅ぼされなければなりません。ヨハネの黙示録では、神様に敵対する悪魔のことを「バビロン（町の色）」と呼びます。この町は、神様を愛さないし、感謝もしないだけでなく、お金をたくさん持ち、自分を偉いと考え、贅沢（ぜいたく）をするように人々を惑わした町です。しかし、この町は最後に神様の怒りによって裁かれることが預言されています。

バビロンに裁きが下ることを喜ぶ賛美が次々と

ヨハネの耳に聞こえてきました。その賛美は、天の大群衆が大声で、「ハレルヤ、救いと栄光と力とは、われらの神のものであり、そのさばきは、真実で正しい。神は、姦淫（かんいん）で血を汚した大淫婦をさばき、神の僕たちの血の報復を彼女になさったからである」と歌っていました。そして、「ハレルヤ、彼女が焼かれる火の煙は、世々限りなく立ちのぼる」と告げました。

24人の長老たちと四つの生き物が、神様を礼拝してひれ伏して礼拝をし「アーメン、ハレルヤ」と賛美しています。天国で神様は偉大なお方として礼拝されています。そのとき、御座から声があつて、神を敬うすべての人々、小さい者も大いなる者も、神様を賛美するように命じました。

花嫁の衣装

それからヨハネは、もっと大きく鳴り響く声を聞きました。それは、大群衆の声か、大水がゴーゴーと流れる音か、激しい雷が鳴る音のようにも聞こえました。その声は、「ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる。われらは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである」と賛美しました。

さあ、イエス様の花嫁さんはだれですか。イエス様を信じて救われた人たち、教会がその花嫁なのです。イエス様が十字架にかかって、私たちの罪の身代わりに死なれ、三日目によみがえられたのは、私たちをこの結婚式の花嫁にしてくださいるためだったのです。

花婿イエス様の花嫁が着るのにふさわしいドレスは、どれほど美しくなければならぬでしょう。その衣装は、光り輝く汚れない麻布でできています。花嫁である教会には、しみやしわのないドレスがピッタリです。この衣装は、罪のしみや汚れを全部、イエス様の十字架の血で洗われ、きよめられた人たちが着ることが出来るものです。私たちは、今日罪のしみのない服を着ているでしょうか。

御使いはこの神様の真実な言葉を書き記すようにヨハネに命じましたが、ヨハネは思わず御使いの足元にひれ伏してしまいました。すると御使いは、自分はヨハネと同じ神様の僕仲間なのだから礼拝してはいけないと告げました。そして、ただ神様だけを礼拝するように教えてくれたのです。

まとめ

イエス様の結婚式では、御使いも、天の万軍も力いっぱい心から神様を賛美します。悪魔はもう裁かれ、私たちの罪が完全にきよめられて、神様と私たちが、完全に一つにされる永遠の始まりだからです。みなさんはもうイエス様の十字架によって罪を赦（ゆる）されていますか。おわびしなければならぬ罪があるなら、すぐに悔い改めましょう。イエス様はもう用意を整えて、この結婚式の日が来るのを、今か今かと待っておられます。イエス様はどんな罪のしみも、十字架の血で完全にきよめ、イエス様の結婚式に出られるように、あなたを招いてくださっています。

♪ワワワいっしょに♪（プレイズワールド6）



聖書 黙示録20・1～15 テーマ 悪魔の最後

序論

(金井)

聖書の最初の書『創世記』は次の話から始まっている。①神が天地を創造された。②「へび」＝悪魔の誘惑によって、人類の始祖が神の戒めに背き、善悪を知る木の実を食べた。③その結果、死が人類と全被造物を支配するようになった。聖書の最後の書『ヨハネの黙示録』は、これを見事に逆転する神のみ業を記している。今日は問題の根本である〈悪魔〉の最後について学ぼう。

一、悪魔の捕囚と千年王国

聖書の世界観では、霊の世界は天と地と地下(よみ)の三層構造になっている。悪魔は元来、高位の天使であつたが、自ら神のようになろうとして反逆したため、よみに落とされた(イザヤ14・12～15)。悪魔は「空中の権をもつ君」(エペソ2・2)であり、「全世界は悪しき者の配下にある」(1ヨハネ5・19)。

しかし、神の御子イエス・キリストは天から地上に降り、十字架の死によって人類の罪を贖(あがな)われた。そして、キリストはよみに降り、あらゆる悪しき霊的権力者を征服して、復活し、天の最も高き所、神の御座にまで昇られた。キリストは全天地、よみの底に至るまで全領域の主である(1・18、マタイ16・18、28・18、エペソ1・20～22、4・8～10、ピリピ2・6～11、コロサイ2・14～15)。

キリストが再臨される時(19・11～16)、「獣」＝反キリストと「地の王たち」は戦いをいどむが、敗れて、偽預言者や偶像崇拜者と共に「硫黄の燃える火の池」に投げ込まれる(19・19～20)。

そして、「悪魔は〈底知れぬ所〉に投げ込まれ、〈千年の間〉つなぎおかれる。この時、〈イエスのあかしをし神の言を伝えたために首を切られた人々〉と〈獣をもその像をも拝まず、その刻印を額や手に受けることをしなかった人々〉は〈生きかえって、キリストと共に千年の間、支配〉する。〈これが第一の復活である〉。この復活にあずかる者は幸いである。ただし、千は完全数なので、実際の期間は千年ではないという解釈もある。

二、悪魔の解放と処刑

〈千年の期間が終ると、サタンはその獄から解放される〉。サタンは〈地の四方にいる諸国民〉を惑わし、戦いのために召集する。〈マゴグ〉は黒海とカスピ海の間にある地の名であり、〈ゴグ〉はその王である(エゼキエル38～39章)。〈その数は、海の砂のように多い〉。

〈彼らは地上の広い所に上ってきて、聖徒たちの陣営と愛されていた都とを包囲〉する。この〈都〉はエルサレムを指す(詩篇78・68、87・2)。

この時、神に敵対する勢力に対する神のさばきが下る。〈すると、天から火が下ってきて、彼らを焼き尽した。そして、彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄との池に投げ込まれた。そこには、獣もにせ預言者もいて、彼らは世々限りなく日夜、苦しめられるのである〉。

三、最後の審判

〈また見てみると、大きな白い御座があり、そこにいますかたがあつた〉。このお方は裁き主なるキリストである(マタイ25・31～33、ヨハネ5・22、IIコリント5・10)。「天も地も御顔の前から逃げ去って、あとかたもなくなつた」。この時、天地万物は更新される(IIペテロ3・10～12)。

〈また、死んでいた者が、大いなる者も小さき者も共に、御座の前に立っているのが見えた。かずかずの書物が開かれたが、もう一つの書物が開かれた。これはいのちの書であつた。死人はその仕業に応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた。海はそこにいる死人を出し、死も黄泉もその中にいる死人を出し、そして、おのおのその仕業に応じて、さばきを受けた〉。これは第二の復活であり、全人類に対する最後の審判である。〈このいのちの書に名がしるされていない者はみな、火の池に投げ込まれる〉。これが第二の死であり、永遠の刑罰である(マタイ25・46)。

結論

イエス・キリストは〈初めであり、終りで〉ある(1・17)。彼こそ歴史の支配者であつて、主権をもつてこの世を終結し、万事を清算されるお方なのである。今の世では悪魔が跳梁跋扈(自由)のさばり、はびこる)しているが、キリストは完全に悪魔を打倒し、滅ぼされる。だから、私たちはいかなる困難の中にも希望を持ち続けることができる。悪魔と共に滅びていこうとする人々を救い出し、永遠の御国に導こう。

研究資料

(足立宏)

黙示録全体の主題は、全ての敵に対するキリストとその教会との勝利と言えよう。サタンもまた、火と硫黄の池に投げ込まれる(20・10)。その時、教会を苦しめる敵は一人もいなくなる。この個所は「教会の勝利」(19・11～21・8)に属し、「サタンの捕縛」(1～3節)、「聖徒たちによる支配」(4～6節)、「サタンの解放と完全なさばき」(7～10節)、「最後の審判」(11～15節)と区分可能。

テキスト

1 これ以下の節は19・20と密接に関連している。獣とその追従者、そしてその偽預言者の破滅後、サタンが取り扱われる。サタンは底知れぬ所へ投げ込まれ、千年の間そこで捕らわれる。底知れぬ所は、悪魔の居所(参照9・1、11・7)。御使いの派遣はサタンが諸国民を欺くのを抑制するためである。底知れぬ所のかぎと大きな鎖 この表現は御使いが悪魔を拘束する底知れぬ所に対する権威をもっていることを示す象徴。

2 彼は、悪魔でありサタンである龍、すなわち、かの年を経たへびを捕えて、すでに獣と偽預言者は火の池に投げ込まれてしまった(19・20)ので、彼らを背後で操っていたサタンに対して神の御手がのべられる。しかし神ご自身が直接サタンを捕らえるのではない。彼を捕らえるのは御使いの一人、千年の間つなぎおき 文字通り千年を表すと言うより、長さの象徴と思われる、かなり長い期間を意味するのであろう。千年という言葉は、この20章に6回記されている(2、3、4、5、6、7)。

3 御使いはサタンを、底知れぬ所に投げ込み、入口を閉じてその上に封印し、サタンは完全に支配され(参照イザヤ24・22)、その活動がいつさい封じ込められる。したがって、諸国民を惑わすこともできない。サタンは千年の間全く手をこまねているが、神によって解放されねばならない。神がサタンを解放される時、彼は出て行って神に対して最後の抵抗を試みる(20・8、9)。

4 ヨハネは、かず多くの座を見た(参照ダニエル7・9)。この座がどこにあるかは語られていない。その上に人々がすわっていた。この人々とはおそらく、後述のイエスのあかしをし神の言を伝えただめに首を切られた人々と、獣をもその像をも拝まず、その刻印を額や手に受けることをしなかった人々、のことであらう。しかし使徒たち(マタイ19・28)、聖徒たち(1コリント6・2)もさばきを行うと言われているので、殉教者及び迫害に耐えた人たちという枠に限定しない方がよいであらう。彼らにさばきの権が与えられていた。これは3・21の成就と理解可能。彼らは生きかえって、キリストと共に千年の間、支配した。キリスト者は王権と勝利を持ってその王座に着かせられる。

5 それ以外の死人は、千年の期間が終るまで生きかえらなかつた。千年王国の特権に与るのはキリストに属する者たちだけ。それ以外の死者とは、キリストに属していない不信仰者を指すと考えられる。

6 さいわいな者であり 本書に散りばめられている祝福の第五番目である(1・3、14・13、16・15、19・20・6、22・7、14)。これらの人々に対して、第二の死はなんの力もない。キリストに属している者も

肉体としての死を経験した。これが第一の死。しかし彼らはキリストにより、朽ちることのない栄光のからだに復活させられる(1コリント15・42～44)。この栄光のからだに対して第二の死は何の力も持っていない。第二の死とは、永遠の死(参照19・20、20・10、14)。彼らは神とキリストとの祭司となり(参照5・10、イザヤ61・6)。ここでは祭司職と王権が密接に結びつけられ、キリストに属する者たちが、神に奉仕することの重要さが強調されている。

7 先に言及された(20・2、3)千年の期間が終ると、神が定めたとおりサタンは一時的に解放される。

8 ここでサタンは諸国の民を惑わす象徴。サタンが戦いのために召集する民の数は、海の砂のように多い。これは最終的な戦いの決定的な瞬間(参照17・14、19・19)。

9 サタンに召集された者たちは、地上の広い平地に上つてきて、聖徒たちの陣営と愛された都を包囲した。愛されていた都とは霊的なエルサレムの象徴と思われる。しかし神の超自然的な力に圧倒され、戦わずして滅ぼされてしまう。

10 悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれる。そこには獣も偽預言者もいる(19・20)。悪の指導者たちが皆、永遠にさばかれる。

参考図書 山口昇「ヨハネの黙示録」『新聖書注解・新約3』(いのちのつばは社)、

Johnson, A. F., "Revelation" The Expositor's Bible Commentary, Vol. 12 (Zondervan), Morris, J. L. Revelation (IVP).

聖書 黙示録20・1～15

タイトル

悪魔の最後

暗唱聖句

彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄との池に投げ込まれた。

黙示録20・10

目 標

どんなに暴れても悪魔は最後には滅ぼされることを知る。

導入

(光田)

悪魔とかサタンとかいう名前を聞いてうれしくなることはありません。それは、神様に反抗している霊で、私たちをいつも惑わそうとして働いているからです。ところが、今日の聖書では、この悪魔が完全に滅ぼされてしまうという預言が記されています。さあどんなことが分かるのでしょうか。

千年王国

一人の御使いが、底知れないところの鍵と大きな鎖とを手持って天から降りてきました。彼は悪魔である竜と呼ばれ、年老いた蛇といわれるサタンを捕まえて、千年の間つなぎ、底知れない深いところに投げ込んで、入り口を閉めて閉じ込めてしまいました。そこに封印をして、もうだれもサタンにだまされないようにしておいたのです。この千年の期間は、惑わしたり訴えたりするサタンが閉じ込められているので、平和なときが訪れます。しかし、千年後に再びサタンは解放されることになっていました。

第一の復活

ヨハネが見ていると、今度はたくさんの方々があつて人々が座っていました。その人々には裁判をする権威が与えられていました。その裁きの座に着いている人の中には、イエス様のことを大胆に証して、み言葉を伝えたために、首を切られて死んだ人たちがいました。この迫害されて命を落とした人たちは、どんな偶像も拝まず、イエス様だけに従った勇敢な人々です。彼らは生き返つて、千年の間、神様と共に地上を支配します。これが、第一の復活です。第一の復活にあずかれる人は、イエス様を信じて、戦ってきた祝福された人々です。彼らは聖なる者と呼ばれ、もう二度と死ぬことがありません。第二の死と呼ばれる永遠の滅びは、彼らには関係ないのです。しかし、第一の復活にあずかれない人たちは、千年が終わるまで復活することはできません。

この千年の期間が終わると、サタンが獄から解放されます。そして地上のあらゆる国から仲間を集めて聖徒の住む町エルサレムを取り囲みます。しかしそこに天から火が下つて、サタンとその仲間とを完全に滅ぼしてしまうのです。そして、悪魔は火と硫黄の池に投げ入れられてしまいます。そこには偽預言者や神様に逆らう者が入れられて、昼も夜もなく苦しめられ続ける恐ろしいところなのです。

白い御座

次に現れるのは大きな白い御座です。そこには神様がおられ、古い天も地もすでになくなっています。王様だった人も小さな子どもも、すべての人が神様の御前に一人ひとり立っています。また、

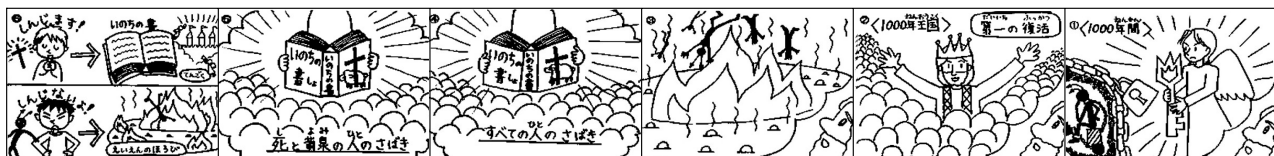
それぞれの人が生きている間にしてきた良いこと悪いことが、ビデオのように全部残らずに記録されている巻物があります。そして、その記録に従つて神様が公平に裁かれます。死と黄泉(地獄)に行っている死人もみんな出てきて、神様の裁きを受けます。そしてついに死と黄泉は、第二の死と呼ばれる火の池に投げ入れられてしまいます。第二の死とは、永遠の滅びのことです。イエス様を信じない人たちは、皆この火の池に投げ込まれます。一体どうすればこの恐ろしい火の池から逃れることができるのでしょうか。その方法はただ一つ、いのちの書に名前が記されていることです。イエス様をあなたの罪からの救い主と告白し、信じ従い続けることが重要なのです。

まとめ

悪魔は自分がこのように完全に滅ぼされる日が来ることをよく知っています。だから悪魔は今も、自分と同じように滅びていく道連れを作ろうと必死で働いています。イエス様を信じなくてもいいと思わせたり、惑わしたり、私たちが罪を犯してしまうように誘ったりします。教会学校に熱心に行くのを止めさせたり、み言葉を信じさせないようにも働くのです。

イエス様は私たちをこの永遠の滅びから救い出すために、十字架にかかって死なれ、よみがえってくださいました。だれでも今、悔い改めてイエス様を信じるなら、いのちの書に名前が記されます。あなたはもういのちの書の前に名前が記されていますか。イエス様を信じて、永遠の命をいただく人たちが起こされるように伝道しましょう。

♪歌えイエスの勝利を♪ (プレイズワールド45)



聖書 黙示録21・1～9 テーマ 新しいエルサレム

序論

(金井)

聖書の終末論には悲惨な場面が多くある。人間の罪は大きく、神の裁きは厳正なのである。今の世は草花のようにしておれて、燃やされてしまう。しかし、神は「新しい天と新しい地」を用意されている。御国の完成について2週続けて学ぼう。

一、新しいエルサレム

ヨハネは御使いによって最後に「新しい天と新しい地」の幻を見せられた。「先の天と地とは消え去り、海もなくなってしまう。神の贖いのみわざは人間だけではなく、全被造物に及ぶ(ロマ8:19～22)。万物が更新されるのである。

「また、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下つて来るのを見た」。この都は天に召された聖徒の群れ、栄光の教会である(エペソ5・26～27、ヘブル11・16、12・22、13・14)。教会は花嫁、キリストは夫である。

「その都の輝きは、高価な宝石のようであり、透明な碧玉のようであった。それには大きな、高い城壁があつて、十二の門があり、それらの門には、十二の御使いがおり、イスラエルの子らの十二部族の名が、それに書いてあつた。東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門があつた。また都の城壁には十二の土台があり、それには小羊の十二使徒の十二の名が書いてあつた」。

た」。この都では、旧約の聖徒「イスラエルと、新約の聖徒」キリスト教会が一つにされている。

「わたしに語っていた者は、都とその門と城壁とを測るために、金の測りざおを持っていた。都は方形であつて、その長さと幅とは同じである。彼がその測りざおで都を測ると、一万二千丁であつた。長さと幅と高さとは、いずれも同じである。また城壁を測ると、百四十四キュビトであつた。これは人間の、すなわち、御使いの尺度によるのである」(15～17)。「一万二千丁」は2千220キロメートルであり、「百四十四キュビト」は約65メートルであるが、これらは12部族・12使徒と関係がある象徴的な数字と解釈もできる。(12×千、12×12) イエス・キリストはまさに聖徒たちのために住むべき場所を用意するために天に昇られたのであつた(ヨハネ14・2～3)。

二、神の臨在と栄光

新しいエルサレムが天から下つて来る時に、ヨハネは「御座から大きな声が叫ぶのを聞いた、「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいとして下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去つたからである」。

アダムとエバが神の戒めに背いて以来、人類はどれほど多くの悲しみや痛みを負ってきたことだろうか。神は聖徒たちの忍耐をすべてご存じであり、それらに豊かに報いて、大いなる慰めと永遠の平安を与えてくださる。何よりも、神ご自身と

共にあること、これに勝る幸いは無い。

「都は、日や月がそれを照す必要がない。神の栄光が都を明るくし、小羊が都のあかりだからである。諸国民は都の光の中を歩き、地の王たちは、自分たちの光榮をそこに携えて来る。都の門は、終日、閉ざされることはない。そこには夜がないからである」。完成された御国には神の栄光が輝いている。神の完全な保護の中に聖徒は憩う。

三、勝利を得る者

主はこのような幻を見せつつ、ヨハネに警告を与えておられる。「見よ、わたしはすべてのものを新たにする」。「書きしるせ。これらの言葉は、信ぜべきであり、まことである」。「事はすでに成つた。わたしは、アルパでありオメガである。初めてであり終りである。かわいている者には、いのちの水の泉から価なしに飲ませよう。勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐであろう。わたしは、彼の神となり、彼はわたしの子となる。しかし、おくびょうな者、信じない者、忌むべき者、人殺し、姦淫を行う者、まじないをする者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者には、火と硫黄の燃えている池が、彼らの受くべき報いである。これが第二の死である」。

結論

終末時代には多くの災難と迫害が起こる。しかし、私たちは栄光のゴールめざして、忍耐をもつてこの道を走り通したい。主はいのちの水をもつて私たちを生かし、慰め、助けてくださる。

研究資料

(足立宏)

使徒ヨハネに与えられた幻とは、いわば神の義と平和による永久の支配を描写したものである。審判は終わり、世界は浄化され、至るところに喜びと調和が行き渡っている。しかし彼が見た新天新地とは何を意味するのか。或いはそれらが新しくなったとはどういう意味か。そして先の天と地が消え去ったという情報をどう理解すればよいのか。旧約の預言者たちも天と地の終結に言及している(例、詩篇102:26、イザヤ34:4、51:6)。使徒ペテロも、神の義が支配する新天新地が起こるために大火とこの世の崩壊を予告した(Ⅱペテロ3:7、10、13)。そしてキリストは宣告した、「この天地は滅び去ります。しかし、私のことばは決して滅びることがありません」(マタイ24:35、新改訳)。確かに聖書全体の証言から古いものは廃棄され、全てが新しい創造により置き換えられることが告げられている。

テキスト

1 新天新地は回復されたエルサレムの幻としてイザヤによって予知されていた(イザヤ65:17)。ヨハネは新天新地を精神的思想としての天国或いはかけ離れた楽園として描写してはいない。注目すべきことは、彼が新天新地の現実を来たるべき究極の時期として焦点を当てていることにある。そもそも神は人間の永続する居場所として地と天を創造された。しかしこの世界に罪と死が入り、残念ながら地は反逆と疎外の場所に移行した(換言すれば敵の支配地になった)。けれども神は救いの歴史をもた

らし続けた。それはこの悪の現象を完全に征服し、罪と墮落の捕らわれから地と天を自由にするため(ローマ8:21)。先の天と地はこの世にあるいのちの全秩序に言及している。つまり罪、死、苦しみ、偶像崇拜により腐敗した秩序。ヨハネの天と地の強調点は、おおむね宇宙論的ではなく実際かつ霊的なものである。それはペテロが言うところの正義がすむ新天新地である(Ⅱペテロ3:13)。新しいと訳される原語(カイノス)は時における最近、新しさと言うより、質や新規において新しいことを意味する。つまり新天新地は第二の天と地を意味するのではなく、終わりのない新天新地の継承を示唆している(黙示録2:17、3:12、参照エペソ2:7)。海13:1では悪魔的な獣の源を意味し、20:13では死人の場所である。その海がなくなってしまう。ここでの強調も地理的なものではなく実際かつ霊的なものである。ここで海は悪を内包する原型として使われているように思える。それ故どんな類の悪も新天新地には存在し得ない。

2 ヨハネは聖なる都、新しいエルサレムを見た。この新しさ、聖さは、現在の世とは明確に区別された性質を持つていて、新天新地にふさわしいエルサレムである。神のもとを出て、天から下って来る新しい秩序の起源が神にあることを示す。

3 再度ヨハネは、御座から大きな声が叫ぶのを聞いた。その声の大きさと源は一人の御使いによるものと考えられる。神の幕屋 ここでは一時的な住まいを意味するのではなく、神の圧倒的な臨在への言及であろう(参照レビ26:11、エゼキエル37:27)。その臨在の栄光の間に私たちキリスト信仰者がと

にもある。贖われた者たちは諸国から集められるが、キリストにあつて一つである(ガラテヤ3:28)。神自ら人と共にいまして エゼキエルへの幻が実現している(48:35)。

4 神だけがご自分の民の慰め主となる。人の目から涙を全くぬぐいとって下さる 神の配慮は無尽蔵である。ヨハネはここで終局に至る禍のリストを少しあげている。死が最初。死に究極の勝利はなく、神の民はそれが終わるべきものとして目にする。これは創世記3章の呪いの破棄である(参照1コリント15:54)。悲しみも、叫びも、痛みも 終わる。全ての苦しみの根元が取り去られる。理由は、先のが、すでに過ぎ去ったから 小羊キリストの完全な征服。

5 御座にいますかたが言われた 黙示録において神ご自身が直接語られるケースは少ない(参照1:8、16:1、7)。見よ、わたしはすべてのものを新たにする 神が天地を一新することを再確認させるメッセージ。書きしるせ。これらの言葉は、信すべきであり、まことである ここにキリスト信仰者の究極の希望があることを宣言している。

6 事はすでに成った(ゲナゴン) 神が終わりの時に実現されるいつさいのことはみな確実に成就する。

参考図書 山口昇「ヨハネの黙示録」『新聖書注解・新約3』(いのちのことば社)。

Johnson, A.F., "Revelation" The Expositor's Bible Commentary Vol. 12 (Zondervan), Morris, L., Revelation (IVP).

聖書 黙示録21・1～9
タイトル 新しいエルサレム
暗唱聖句 わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。 黙示録21・1
目 標 古い天地は去り、神が備えてくださる新しいエルサレムが来ることを待つ。

導入

(光田)

皆さんの周りには何年経っても変わらず、古くならないものがあるでしょうか。今年買ったノートも教科書も机も鉛筆も、みなどんどん古くなっています。ところが、神様は古びず汚れない、本当に新しい国を私たちに約束してください。

新しい天と地

神様が約束してください、新しい天と地とはどんなところでしょうか。なくなってしまうものがあります。それはまず、今まであった天と地です。海もなくなってしまう。宇宙全体がすべて新しくなります。そして、神の都と呼ばれる新しいエルサレムが、神様のところから降りて来るのを、ヨハネは見ました。それはまるで、花婿を迎えられる花嫁がウエディングドレスで着飾ったような用意をして、天から降りてきました。

すると、大きな声が聞こえます。「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいとって下さる。もはや、死もなく、

悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである」。なんてすばらしい世界でしょう。

今、日本も世界も、戦争、殺人、自殺、けんか、いじめ、病気や苦しいことがたくさんあります。けれども、神様が最後に用意してください、天国には、慰めと喜びだけが約束されています。

いのちの川の水

また御座におられる神様が「見よ、わたしはすべてのものを新たにします」と言われます。そして、これからの言葉を書いて残すように、ヨハネに命令されました。そして、これからの言葉は、本当に起こること、必ず信じなければならぬこと、だと言われました。ヨハネが聞いたのは、神様のなさるすべてのみわざはもう終わった、完成したという言葉です。そして神様は「わたしはアルパでありオメガである。初めであり、終りである」と言われました。神様がすべてを始められ、そして完成なさるお方であることを宣言されたのです。次に聞こえるのは、心に渴きを感じる人はだれでも、ただでいのちの川の水をたくさん飲むようにという声です。いのちの川の水はどんな味がするのでしょうか。のろわれたものが一つもない国で、神様の永遠のいのちの水を飲むことができる人はどんなに幸せでしょう。しかも、イエス様を信じて信仰の戦いを立派に戦ってきた人には、神様の子どもとなる約束が与えられています。

でもこの水を飲むことができない人がいるのです。それは、臆病な人、信じない人、汚れたことをする人、人を殺す人、姦淫をする人、まじない

をする人、占いをする人、神様を第一にしないでほかのものを大事にし偶像礼拝する人、うそをつく人などはみんな飲めません。これらの人々は、最後に火と硫黄の燃える池に投げ込まれ、第二の死を受けなければならぬのです。なんと言う恐ろしいことでしょうか。

まとめ

イエス様は、罪を悔い改めないままの人間が死んだ後に、どんなに苦しく厳しい裁きと滅びが待っているかをご存知でした。だから、ご自分から十字架にかかって、罪の解決をくださったのです。私たちは今、イエス様の救いを受け取ることができ、ただイエス様の十字架に信頼して、新天地に入っていくことができます。この約束の日まで、私たちは勇敢な信仰の戦いを戦い抜いていきましょう。悪魔の惑わしを見破り、み言葉をしっかりと握って悪魔に立ち向かいましょう。

例話

20年ほど前、90歳で天に召されたM姉は、ご主人も息子さんも先に亡くなっていたため、晩年の数年間は、教会のすぐ近くのアパートに住んで一人暮らしをしておられました。礼拝はもちろん、朝と夜の祈禱会、教会学校の受付当番も無欠席でした。この方は、寝ているときに、もしイエス様がおいでになって、汚いものを見られてはいけないうと、毎晩きちんと洗濯をし、身の回りを整えてから休んでおられました。今晩イエス様がおいでになられるかもしれないと、心の準備がいつもできていたのです。

♪まもなくこの世に♪

(教会学校せいか55)



聖書 黙示録22・157

テーマ 神の都

序論

(金井)

二〇〇六年度最後の週となった。今日は、聖書の最後にあるヨハネの黙示録22章から、永遠の御国について学ぼう。

一、いのちの木

使徒ヨハネは〈御使〉によって最後に、完成された神の国〔聖なる都、新しいエルサレム〕(21・2)の内部の様子を見せられた。その恵みに満ちた世界は、アダムとエバが追放された楽園の回復であり、それ以上のものである。

この都には〈水晶のように輝いているいのちの水の川〉が流れている。〈この川は、神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れている。川の両側にはいのちの木があつて、十二種の実を結び、その実は毎月みり、その木の葉は諸国民をいやす〉。

エデンでは、〈主なる神は、見て美しく、食べるに良いすべての木を土からはえさせ、更に園の中央に命の木と、善悪を知る木とをはえさせられた。また一つの川がエデンから流れ出て園を潤し、そこから分れて四つの川となった〉(創世記2・9、10)。アダムとエバは許されていた〈命の木〉の実を食べず、禁じられていた〈善悪を知る木〉の実を食べたために、園から追放された。〈悪〉を持った人間が永久に生きるものとなったら、大変な問題となる(創世記3・22)。

しかし、〈新しいエルサレム〉では、キリストによって罪を贖われ、悪からきよめられた聖徒たちが、〈いのちの木にあずかる特権を与えられる(22・14)〉。

二、御顔の輝き

かつて預言者エゼキエルは、〈宮〉から流れ下る〈川〉の幻を見た(エゼキエル47・1)。しかし、〈新しいエルサレム〉には〈いのちの水の川〉はあるが、〈聖所〉が無い。そこでは〈全能者にして主なる神と小羊とが、その聖所なのである〉(21・22)。もはや神と民との仲保者である祭司〔聖職者〕は不要であり、〈宮〉も不要である。

〈神と小羊との御座は都の中にあり、その僕(しもべ)たちは彼を礼拝し、御顔を仰ぎ見るのである〉。

使徒パウロはこの希望を告白した。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔を合わせて、見るであろう」(1コリント13・12)。

使徒ヨハネもこの希望を告白した。「彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである」(1ヨハネ3・2)。

神に直接まみえることができるとは、驚くべき光栄ある立場である(1テモテ6・16、イザヤ6・5)。

〈彼らの額には、御名がしるされている〉。これは聖徒たちが神の〈僕〉、神の所有とされていることを表す。神は私たち一人一人をご存じであり、

愛してくださっている。

〈都は、日や月がそれを照す必要がない。神の栄光が都を明るくし、小羊が都のあかりだからである〉(21・23)。ああ、驚くべき御顔の輝き！

三、永遠の平和

〈諸国民は都の光の中を歩き、地の王たちは、自分たちの光栄をそこに携えて来る。都の門は、終日、閉ざされることはない。そこには夜がないからである〉(21・24、25)。都の城門は、外敵や盗賊、害獣から住民を守るために、夜は閉められるものである。しかし、この新しい世界には害悪が全く無いので、門は開けたままでよい。

〈夜は、もはやない。あかりも太陽の光も、いらない。主なる神が彼らを照し、そして、彼らは世々限りなく支配する〉。

『ヨハネの黙示録』の受取人であるアジア州の7つの教会の人々は、ドミティアヌス帝に皇帝崇拜を強要され、激しい迫害を受けていた。キリスト者にとつて信仰の故郷と言うべき、愛する都エルサレムは70年にローマ軍によって破壊されていた。彼らには安息できる都市が無かった。

しかし、私たちキリスト者には永遠の都、永遠の平和が備えられている。老使徒ヨハネは御国における大逆転の希望を伝えたのである。

結論

私たちもこの希望を堅持して、主の再臨を待ち望みたい。〈しかし、わたしはすぐに来る〉。アアメン、主イエスよ、きたりませ(22・20)。

研究資料

(足立宏)

この区分(22・1〜5)は21・9から続いている新しいエルサレム(聖なる都)の描写に属する。ここで強調点は、その内部の躍動にある。

テキスト

1〜2 使徒ヨハネがこの幻において見たものは回復された樂園である。最初の人アダムにあって喪失された全てのものが回復され、さらにキリストにあつて回復以上のものがもたらされる。エデンの園で流れていた川(創世記2・10)が、いのちの水の川として再出現し、水晶のように輝いている。ここにはエゼキエルの幻にも繋がるものもある(47・1〜12)。この点に関して新しいエルサレムと、エデンの園或いはエゼキエルの新しい神殿とが対比されている。この川は、神と小羊との御座から出て、エゼキエルにおける川は神殿の敷居の下から流れ出ている(47・1)のに対して、ここでは神の御座そのものから流出。これはこの川が神に起源を持つことを示唆している。小羊は、御座と長老たちの間(5・6)、御座の正面(7・17)にいたが、ここでは神とともに御座に着いている(参照3・21)。確かに御父と御子の人格に識別はあるが、ひとつの御座に着座した二つの実体を考察すべきである。というのは、神は唯一であり(1テモテ2・5、ガラテヤ3・20)、御父と御子は一つであるから(ヨハネ10・30)。ここで最も重要なことは、神と小羊の御座が私たちに伝える事実にある。すなわち私たちの救い主なる神は全ての創造主であり、墮落した被造物の贖

い主でもある。そして彼の御座から流れ出る川は、事実主の恵みの生ける水の川である。小羊なる神であり創造主なる神は、和解者としての神である(Ⅱコリント5・19)。よつて栄光にある御使いたちは賛美する(黙示録5・11〜13)。都の大通りの中央を流れている。エゼキエルにおける川は神殿から東方に流れ出て、荒野を潤している(47・8)。しかしここでは都から外部には流れでないで、都のみを潤している(参照詩篇46・4)。川の両側にはいのちの木があつて……その木の葉は諸国民をいやす。すなわちそこにはその木に結びつく豊かないのちを途絶えさせる死はもはやないと言うこと(20・14、21・4)。またこのいのちの木は、墮落したアダムが追われたいのちの木(創世記2・9)と直接の結びつきをほめかす。いのちの水とその川は、無尽蔵の神の恵みを象徴している(参照詩篇65・9)。

3〜5 のろむべきものは、もはや何ひとつない。創世記1〜3章の記録と結び合わせることで聖なる都の告知が浮かび上がる。これは、最初の人(下)の除去とゼカリヤの預言の成就(ゼカリヤ14・11)を意味する。またこれは私たちのために十字架で御子(ご自身)をなだめられたものとしてささげられたことに全く依拠している(ガラテヤ3・13)。神と小羊との御座。御座(スロノス)は単数なので、父と子が一体であることを意味する。そこには無尽蔵の恵みとのろいと責めから救われた民への祝福がある。その僕たちは彼を礼拝し。参照7・14以下。御顔を仰ぎ見る。ただ神の臨在の中に憩うと言うだけでなく実際に神の顔を見るところで、これこそ

全ての幸福の頂点であり総計である。すなわち三位一体の神の一体性を完全に知り、創造主と交わり、贖いの恵みを感じ、躊躇なき確信を持つて彼の前に立ち、至高の愛の中で彼と心を分かち合う礼拝である。この祝福に満ちた親密な関係によつて、あらゆる世代における主の忠実な僕たちが待ちこがれていた期待が永遠に実現するのである。ヨブは神ご自身が贖い主として自分を義としてくださるという幻を見た(ヨブ19・25〜27)。ダビデの心も同様な確信に満たされた(詩篇17・15)。主の御顔を見ると言うことは、全ての疑い、不確かさ、無知が一掃されることも意味する。使徒パウロが言うとおりである(Ⅰコリント13・12)。使徒ヨハネの確信(Ⅰヨハネ3・2)。彼らの顔には、御名がしるされている。これまでも本書3・12、7・3、14・1で語られてきた。これは彼らが神の宝であり又神の所有であると言うだけでなく、この神の都において神に知られず愛されない人は一人もないことを意味する。夜は、もはやない……主なる神が彼らを照し。すでに21・23、25で記されている。これも使徒パウロが言ったことが成就し、おおいがはすされた経験となる(Ⅱコリント4・6)。これこそ究極的な光である。彼らは世々限りなく支配する。彼らは、王の王、主の主(17・14、19・16)であるキリストとともに共同で統治することになる(Ⅱテモテ2・12、参照ローマ8・17、ルカ22・28〜30)。

参考図書 鈴木英昭「ヨハネの黙示録」『実用聖書注解』(いのちのことば社)、Hughes, P.E., The Book of The Revelation (Eerdmans)

聖書 黙示録22・1～7

タイトル 神の都

暗唱聖句

御使はまた、水晶のように輝いて

いるいのちの水の川をわたし

に見せてくれた。黙示録22・1

目 標

約束されている永遠の神の国の

希望に生きよう。

導入

(光田)

先週はヨハネが見た新天新地のことを聞きました。神様の用意された永遠の国の様子をもっと詳しく知ることしましょう。

いのちの水の川

21章でヨハネは、花嫁と呼ばれている新しいエルサレムがどのようなところかを見せてもらっています。エルサレムは高価な宝石のように輝いています。城壁は碧玉(碧玉)で作られ、都は透き通ったガラスのような純金です。都の土台の石はさまざまな宝石で作られています。12の門はそれぞれ一つの真珠からできています。この聖所を照らす太陽も月も必要ありません。神様とイエス様の栄光で輝いているのです。そしてこの都の門は閉じられないことがありません。なぜなら、夜がないからです。神様の都では、もう眠る必要はないのです。うね。

御使いは、ヨハネにいのちの水の川を見せてくれました。この川は都の大通りの中央にあり、水晶のように美しく輝きながら流れています。この川の源はどこにあるのでしょうか。それは、父なる

神様と御子なるイエス様の御座から流れ出ていました。いのちの水の源は、神様ご自身なのです。永遠のいのちは神様からいただくものです。

いのちの木

川の兩岸にはいのちの木が育っています。12種類の木の実が毎月実り、木の葉は葉にもなります。不必要なものや捨てるようなものはなくて、何もかもが役に立つなんてすごいですね。このいのちの木の実は、創世記3章に出てきましたが、アダムとエバが罪を犯してから人間には食べられなくなっていたものです。この新天新地にはのろわれたものが何一つありません。罪も、死もありません。そして、この都に住む人は、神様の御心を行う人たちだけです。だから、神様は、イエス様によつて救われた人たちがいのちの木の实を食べ、神様と共に永遠に生き続けることを喜んでくださるのです。

礼拝の民

この神様の都では何をしていますのでしょうか。こんな幸せなところで何もすることがないのでしょいか。天国は最高のことだけをするところのようです。都の中心は父なる神様と御子なるイエス様です。神様の僕たちはみんな心から喜んで神様を礼拝しています。神様を力いっぱい感謝し、賛美し、神様に仕えることが仕事です。

しかし、今までは信仰の目でしか見ることで、きなかった神様の御顔を、私たちは自分の目で、はっきりと見ることができるようになります。神の僕たちの額には御名の印が付けられています。それは神様のものだという印です。神様の国には夜がありません。もし火も太陽も光も要りません。なぜ

なら神様ご自身が光となって、その栄光がすべてのものを照らしているからです。

イエス様はヨハネに言われました。「これらの言葉は真実で、信じるべき言葉である。父なる神様は預言者を通してすぐに起こるべきことを示そうと、御使いをつかわされたのである。わたしはすぐに来る。この書の預言の言葉を守る者はさいわいである」と。

まとめ

ヨハネの黙示録は、あらかじめヨハネに示された、将来起こる出来事を記したものです。そしてこの最後に、神様が用意されている御国が、どんなに素晴らしいところであるかを、私たちに教えてくださっています。それは良いニュースを先に聞いた私たちが、この預言をしつかり信じて、イエス様のご再臨に備えることが大切だからです。イエス様が十字架にかかってくださったのはこの祝福を私たちが受け取るためです。

イエス様は、再臨の日を今日か明日かと首を長くして待つておられます。そして、だれも福音からめれることがないようにと願っておられます。私たちは、このイエス様の願いに答えるために、まだイエス様のことを知らない人、信じることをできないでいる人たちのために、とりなしの祈りをし、福音を伝えるために出かけに行きましょう。皆さんの中からも、伝道者、宣教者になる人たちが起こされることを神様は期待しておられます。今つらくて、悲しいことがあるお友だちも、イエス様の約束を信じて戦いましょう。

(新聖歌475)



牧羊ひろば

古きを活かし、新しきを拓く 香登教会CS

香登教会では、

本校に加えて、日
生(ひなせ)・木生
(きぶ)・片上(か

たかみ)・伊部(い
んべ)・柏山(かし

やま)・福岡(ふく

おか)の6分校を

開いています。曜

日や時間はそれぞ

れの地域の実情に

合わせています。

今年、創立111周年

を迎えた香登教会

だけに、クリスチ

ヤン・ホームも子

どもたちが安定し

て集っているCSと、

開拓型のCSの両方があり

ます。

安定型のCSでは、

礼拝と分級が守られ、子ど

もたちもわりあい

に落ち着いて参加

しています。

大部分の子どもは、

夏期聖書学校など

で決心して

受洗にいらします。

一方、開拓型のCSでは、

地域の有志信徒とCS

教師たちが、着ぐるみの

ライオンなどといっし

よにチラシを配ったりす

るところからのスタート

です。クリスマス会や夏

休みの子ども大会などの

イベントを通して集まり、

そこから定着した子ど

もたちがメンバーとなり



分校のクリスマス

ヤンのバックグラウンドを持たない子どもたちばかりで、魅力がなければすぐに来なくなってしまう。また、遊ぶだけ遊んで、礼拝タイムになると帰ってしまうこともあります。けれども、ある分校では、二十数年前に来ていた生徒が、お母さんになってから教会に戻って来られて救われ、そのお母さんと小学生の息子さんも受洗されて、三代に渡るクリスチャンが誕生するといったことが起こっています。

一泊二日の夏期聖書学校や子ども祝福式、そしてクリスマス、イースターは本校・分校みんなが集まる機会です。子どもたちの間で各CSをまたいだ交流が生まれ、文通が始まったりもしています。



子ども大会

秋には、CSデイ・キャンプが持たれています。今年、10月21日(土)、初めての試みとして、釣り大会を行いました。教会から車で15分ほどの海で、狙う獲物はハゼです。1時間ほど釣り糸を垂れているうちに、小は大人の小指ほどの可愛いのが釣れる。15cmほどの大きさまで、ぼつりぼつりと釣れるたびに歓声があがります。針にエサをつけたら、かかった魚を外したりするのは、先生たちもかかせの子どもたちですが、魚がエサをつつく手ごたえや、かかった魚とのかげひきを楽しんでいます。釣れたハゼでダシをとったみそ汁と、持参したお弁当を食べた後は、み言葉タイム。全員、おなかもちも大満足の半日でした。(写真が

ればよかったのですが、魚を釣ったり、子どもを追いかけたり、みそ汁の番をしたり、大忙しでシッターチャンス逃してしまいました！」ケガをする子どももなく大変順調でした。その陰にはCS教師たちの入念な準備がありました。現地の事前調査をして、トイレや水場、安全性などを細かく調べる、仕事帰りに100円ショップで釣り竿などをこつこつそろえる、100本の釣り針に糸を結び、みそ汁の下ごしらえなど、多くの労力と祈りがささげられました。



子ども祝福式

こういった活動は月1回のCS教師会で決められますが、これに先立ってCS企画という打ち合わせを開いて、あらかじめ準備をしているのが香登教会の特徴です。CS企画は、2名のCS教師と牧師、副牧師の4名からなります。企画を担うてくださる



夏期学校

先生方の負担は大きいのですが、その祈りと労を通して斬新なアイデアが与えられます。11月の子ども祝福式礼拝の後の「プロと一緒にどら焼きを作る」お楽しみ会、クリスマスの「真昼のキャンドル・サービス」などはこのようにして生まれました。

「子どもが少ない」という声はどこでもよく聞かれます。確かにCSの働きは、簡単ではありませんが、ご聖霊の導きを求めていくところに必ず新しい風が吹くことを感じていただいています。

「古きを活かし、新しきを拓く」は、香登教会百周年のスローガンですが、このスピリットのもと、地域と教会の特性に根ざした発想で、祈りのうちに励んでいます。
(大頭眞一・高取一美)

「おわりに」

『牧羊者』二〇〇六年度第IV巻をお届けできますことを感謝します。執筆者の方々には、秋期の特伝や聖会、クリスマス諸準備など大変あたたかい中を執筆していただき、心から感謝いたします。

「子ども聖書日課」が、多くの教会で用いられていることをお聞きし、大変励まされております。もっと多くの皆様に愛され、用いられるようにと祈っております。次号からのカリキュラムは別紙のように、新しい3年サイクルの1年目になります。期を「牧羊者」の各号に合わせ4期にしました。今後も「牧羊者」が大いに用いられるように、引き続きお祈りください。

終わりに今号の執筆者を紹介いたします。

聖書講解 鎌野善三 鎌野直人 金井望
研究資料 足立 宏 石田高保
メッセージ例 松浦みち子 光田隆代
ワーク 木村純子 鎌野幸
長谷川ひさい 長尾秀紀

加藤清 上森恭子 杉山俊一
中 高 科 小岩裕一
フランチカード 土屋直子 藤井洋美

子ども聖書日課 小野淳子

また、校正をしてくださった鎌野善三師、小岩裕一師、光田隆代師、巻頭言の小岩裕一師、教師養成講座の工藤弘雄師、打ち込みをくださった小岩喜代美師、藤井正子師、楠淳子師、み言葉カードの陰山恭子姉、陰で労された兄弟姉妹の方々、また、発送とワーク印刷をされたベラカ出版の方々、印刷会社の菱三印刷とアクトに心から感謝いたします。(長谷川和雄)

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇〇六年度 IV巻

二〇〇六年十二月十日発行

発行所 有限会社 ベラカ出版

企画監修 日本イエス・キリスト教団教会学校局

神戸市兵庫区塚本通三―三―一九

電話(〇七八)五七五―五五一一

FAX(〇七八)五七五―五六一一

印刷所 菱三印刷株式会社

電話(〇七八)五七六―三九六一

*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み